特別支援教育研究論文集

―令和６年度 特別支援教育研究助成事業―

中学校における発達に課題のある生徒の
進路先の意思決定を促す取り組み・支援についての研究

―特別支援教育コーディネーターができる「人を繋ぐ」から「将来に繋ぐ」支援―

筑紫野市立二日市中学校

研究代表　教諭　村上　郁子

令和7年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

目　次

要旨 …… 1

第１章　研究の背景と目的 …… 2
　第１節　研究の背景 …… 2
　　１　わが国の動向 …… 2
　　２　福岡県の状況 …… 3
　　３　筑紫地区の中学校特別支援学級の状況と課題 …… 6
　　４　本校の現状と課題 …… 7
　　５　生徒自身による進路選択の課題 …… 11
　第２節　研究の目的 …… 14

第２章　研究の実際 …… 14
　第１節　生徒の進路選択の意思決定を促す取り組みの整理 …… 14
　　１　筑紫地区中学校特別支援学級担任へのアンケート調査 …… 14
　　２　校区内の小学校特別支援学級担任・保護者へのアンケート調査 …… 15
　　３　本校の特別支援学級卒業生へのアンケート調査 …… 16
　　４　高等学校へ情報収集のための訪問 …… 16
　第２節　実践 …… 17
　　１　自立活動での指導実践（個別支援・集団支援） …… 18
　　２　学年・学級担任・特別支援学級担任と連携した支援 …… 20
　第３節　特別支援学級担任への参考資料の作成　 …… 22

第３章　研究の結果 …… 25
　第１節　生徒の進路選択の意思決定を促す取り組みの整理 …… 25
　　１　筑紫地区中学校特別支援学級担任へのアンケート調査 …… 25
　　２　校区内の小学校特別支援学級担任・保護者へのアンケート調査 …… 29
　　３　本校の特別支援学級卒業生へのアンケート調査 …… 31
　　４　高等学校へ情報収集のための訪問 …… 32
　第２節　実践の結果 …… 33
　　１　自立活動での指導実践（個別支援・集団支援） …… 33
　　２　学年・学級担任・特別支援学級担任と連携した支援 …… 35

第４章　考察　まとめ …… 37

引用・抜粋・参考文献 …… 39

謝辞 …… 40

要旨

福岡県では、特別支援教育推進プラン（第２期）にて、５つの柱を設定し、就学前における支援の充実を目指している。発達に課題のある生徒が将来的に自立し社会参加するためには、卒業後の生活を見据えたキャリア教育や職業教育の充実が必要である。また、自己肯定感を高めたり、生徒本人の自己選択・自己決定を尊重したりする機会を確保するなど早期からのキャリア教育を踏まえた進路指導のさらなる充実が必要であると示している。

本研究では、筑紫地区の特別支援学級在籍生徒が高等学校に進学する状況から、進路指導の在り方や方法を検証し、改善点を見つけながら、生徒の進路を支援してきた。しかし、進路に関わる課題が多岐に渡ることや個々にあった進路指導を提供できているのかという課題が見えてきた。また、将来の見通しや目標を見出せる方法、生徒が自分のことを客観的に知り、強みをいかした将来設計ができる生徒の育成を目標に、中学校３年間でできる支援方法を見出すことを目的に行った。

ここ５カ年の進学状況を見ると、特別支援学級から高等学校への進学は年々増加し、進学先も多様化している。３年ほど前までは、通信制・サポート校への進学が増えていたが、福岡県では公立高等学校の特色化選抜という入試制度が導入されたこともあり、生徒・保護者ともに全日制の高校進学希望者が増加している。また、特別支援学校への進学は少し減少傾向にあり、就労や自立を目標においた教育課程の学校の選択をせず、全日制やサポート校・通信制などの高等学校卒業を目標にしている生徒や保護者が多くなっている。

さらに、進路指導を進めるに当たって、進学後の進路や将来のことに見通しが持てず、高校への進学が目標になっている生徒が多いと感じる。特別支援学級担任は、生徒の将来や自立を見据えた進路指導を進めていきたいと考えているが、生徒自身が自分のことを客観的に捉え、決められることは自分で決め、自分の気持ちを表現し、高等学校を選択しているのかは不透明な部分が大きい。

このような状況から、自分の就労や自立を見据え、「進路実現」と「将来を支える力」として、中学校在学中に「自己理解」「自己決定」「言語化」を実行機能の視点から支援の手立てとし、将来を支える力をつけ中学校を卒業させたいと考えた。

中学校に入学し、学習や環境は目まぐるしく変化し、学校の生活環境についていくのが精いっぱいの生徒を見てきた。教師は生徒の状況に合わせた支援を行い、生徒と話をしながら様々な方針を立てる。うまくいくときもあれば、いかないときもあり、そのたびに生徒の心が揺れ、不適応を起こす生徒も少なくない。私たち教師は入学してから卒業するまでの３年間でどのような力をつけて生徒を送り出すことができるのかを模索してきた。支援をする側の教師は、「将来を見通す」「自己を理解する」「生徒の自立」を考え、３年後に進路選択ができる生徒の育成を目指し、日々取り組んでいる。

生徒を支援していく中で、大事にしていることは、生徒を「理解する」「お互いを知る」「落としどころをつける」である。対話をする中で、生徒を理解し、どのような支援が適しているのかを判断し、実践する。その日々の積み重ねが、生徒の「自己理解」「自己決定」「言語化」につながると考えている。

キーワード：意思決定　自己理解　自己決定　言語化

第１章　研究の背景と目的

第１節　研究の背景

１　わが国の動向

文部科学省のキャリア教育の手引きには、「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想されています。生産年齢人口の減少、グローバル化の発展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は、大きくまた急速に変化しており、予測が困難な時代となっています。このような時代の中でも、生徒一人一人が、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となることができるよう、生徒の生きる力を育むことが目指されている。」と示されている。手引きの第３章、中学校におけるキャリア教育の第１節では、中学校は、「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すことを目的としている（学校教育法第45条）。この時期は、自我の目覚めや、独立の欲求が高まるとともに、人間関係も広がり、社会の一員としての自分の役割や責任の自覚が芽生えていく時期である。また、他者と関わり、様々な葛藤や経験の中で、自らの人生や生き方への関心が高まり、自分の生き方を模索し、現実的な夢や理想をもつ時期であり、一方で、卒業後の進路選択を迫られ、自分の意志と責任で決定しなければならない時期でもある。このように、中学校の段階は極めて重要である。」と示されている。

中学校段階でのキャリア発達課題

○キャリア発達段階　⇒現実的探索と暫定的選択の時期

○キャリア発達課題

・肯定的自己理解と自己有用感の獲得
・興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成
・進路計画の立案と暫定的選択
・生き方や進路に関する現実的探索

各学年におけるキャリア発達課題の例

１年生	２年生	３年生
・自分の良さや個性が分かる。 ・自己と他者の違いに気付き，尊重しようとする。 ・集団の一員としての役割を理解し，それを果たそうとする。 ・将来に対する漠然とした夢やあこがれを抱く。	・自分の言動が他者に及ぼす影響について理解する。 ・社会の一員としての自覚が芽生えるとともに，社会や大人を客観的にとらえる。 ・将来への夢を達成する上での現実の問題に直面し，模索する。	・自己と他者の個性を尊重し，人間関係を円滑に進める。 ・社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解する。 ・将来設計を達成するための困難を理解し，それを克服するための努力に向かう。

（文部科学省『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』（平成18年11月）をもとに作成）

図１　文部科学省　キャリア教育の手引き　キャリア発達課題　より

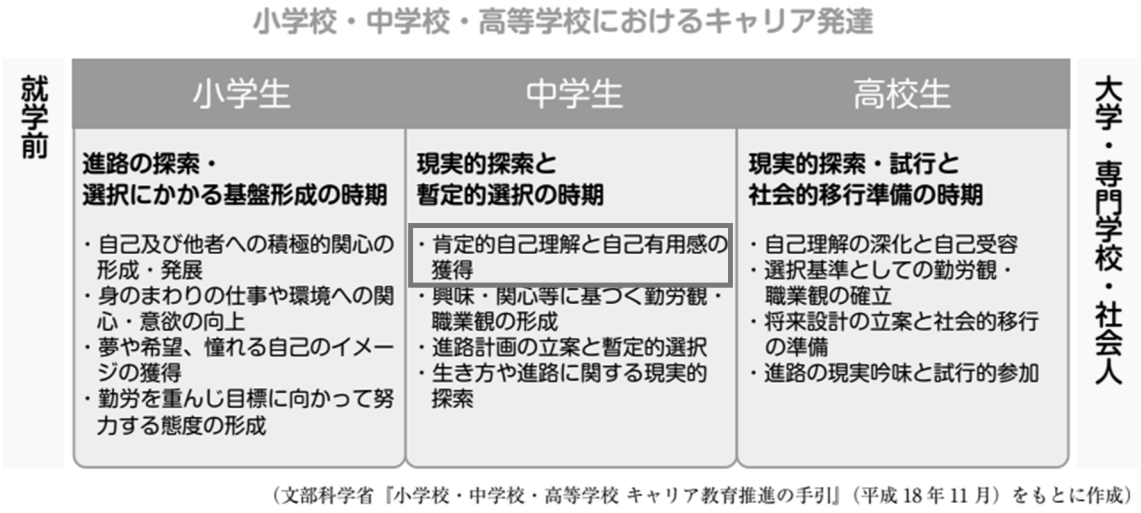


図２　文部科学省　キャリア教育の手引き　より

図２には、キャリア発達の学年別の例が示されている。その中に「肯定的自己理解」という言葉があるように、中学生の時期に「自己理解」をキーワードとしたキャリア発達課題を示している。

２　福岡県の状況

福岡県の特別支援教育における生徒数は年々増加しており、特別支援学級の生徒数は、2024年には1,581人に達し、前年からの増加が見られる。福岡県では、特別支援教育に係る施策推進のための指針となる「福岡県特別支援教育推進プラン」を策定し、特別支援教育に取り組んできた。推進プランでは、障がいのある児童生徒がその能力を最大限に発揮し、自立した生活を送るための重要な役割を果たすための教育を提供することを目的としている。このプランは、以下の主要なポイントに焦点を当てている。

（１）一貫した支援の提供…就学前から学校卒業後まで、一貫した支援を提供することを目指している。これにより、子どもたちがスムーズに成長し、自立できるよう支援する。

（２）個別の教育計画…各児童・生徒のニーズに応じた個別の教育計画を作成し、適切な支援を提供する。

（３）専門的な支援体制の強化…特別支援教育に関わる教職員の専門性を高めるための研修や支援体制の強化を図る。

（４）地域との連携…地域社会や関係機関との連携を強化し、包括的な支援を提供する。

（５）進路指導と就労支援…卒業後の進路指導や就労支援を充実させ、子どもたちが社会で活躍できるよう支援する。

「福岡県特別支援教育推進プラン」の位置づけ

福岡県総合計画（R4～R8）
■ 県政全般に係る政策及び施策の基本的方向を定めたもの

福岡県教育振興基本計画（R4～R8）
■ 本県の教育分野の施策の方向を示すもの

福岡県特別支援教育推進プラン（R4～R8）
■ 本県における特別支援教育推進の理念と重点的に取り組む施策を示すもの

「福岡県特別支援教育推進プラン（第2期）」の基本的考え方

障がいの有無によって分け隔てられることなく、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を認め合える共生社会の実現を目指すためには、「障害者の権利に関する条約」に基づくインクルーシブ教育システムの構築が不可欠であり、一人一人の教育的ニーズに応じて適切な指導及び必要な支援を行う特別支援教育を着実に推進していく必要があります。

県教育委員会では、第1期推進プランにおける成果と課題、国の動向や新たな課題を踏まえ、基本的な視点としての5つの柱は、第1期推進プランの柱を継承するとともに、柱の名称の一部見直しを行いました。そして、この5つの柱に基づき、今後5年間で取り組むべき施策の方向性を示しました。

「福岡県特別支援教育推進プラン（第2期）」の実施に当たって

(1) 推進体制

障がいのある子供の自立と社会参加に向けた主体的な取組を一貫して支援するため、関係者間の連携・協力を密にし、効果的かつ総合的に施策の推進を図ります。

(2) 点検・評価

特別支援教育推進に関する施策については、第2期推進プランの策定趣旨を踏まえ、年度ごとに点検・評価を行い、施策ごとの進捗状況を公表します。

福岡県特別支援教育推進プラン（第2期）

～ 一人一人が輝く共生社会の実現を目指して ～

「福岡県特別支援教育推進プラン」が新しくなりました。

第1期推進プランにおける成果と課題、国の動向や新たな課題を踏まえ、柱の名称の一部見直しを行い、今後5年間で取り組むべき施策の方向性を示しました。

福岡県教育委員会

図３　福岡県特別支援教育推進プラン（福岡県教育委員会ＨＰ）

図４　福岡県特別支援教育推進プラン（第２期）の主な改定ポイント　福岡県教育委員会ＨＰ

福岡県特別支援教育推進プラン（第2期）の主な改定のポイント

柱2　就学前における早期からの相談・支援の充実　P22

第Ⅰ期推進プランの成果と課題

・就学先検討の対象となる幼児数の増加
・子供一人一人のニーズに最も的確に応える指導を提供できる学びの場の検討

主な改定のポイント

・早期からの教育相談・支援の充実
・障がいのある子供の就学相談や学びの場の検討等の支援の充実

【施策の方向】

（1）幼稚園等における特別支援教育推進体制の整備
（2）市町村教育委員会における早期からの相談・支援体制の整備
（3）障がいのある子供の就学相談や学びの場の検討等の支援の充実
（4）保健・医療及び福祉との連携の充実

柱4　安全・安心かつ効果的に学べる教育環境の整備　P26

第Ⅰ期推進プランの成果と課題

・対象児童生徒数の増加に伴う教室不足の解消
・ICT活用による指導の充実のための支援体制整備
・医療的ケアを必要とする子供への支援の充実

主な改定のポイント

・特別支援学校設置基準等を踏まえた施設整備
・ICT環境の整備と活用
・医療的ケア児支援法に基づく支援の充実

【施策の方向】

（1）特別支援学校設置基準等に基づいた学校施設の整備
（2）ICT環境の整備と活用の推進
（3）医療的ケア児への支援と関係機関との連携の推進
（4）障がいによる学習上又は生活上の困難に応じた教育環境の整備

柱1　連続性のある多様な学びの場における教育の充実　P10

第Ⅰ期推進プランの成果と課題

・個別の教育支援計画等の作成率の向上
・特別な支援が必要な児童生徒数の増加
・学校間接続時における個別の教育支援計画等を活用した引継ぎの充実
・障がいの重度・重複化及び多様化に対応した専門性の向上

主な改定のポイント

・柱の体系を学校種別に学びの場を示し、施策の方向性を整理
・切れ目ない支援のための、学校間接続時における個別の教育支援計画等を活用した引継ぎの充実

【施策の方向（共通内容一部改）】

（1）一人一人の障がいの状態や発達段階等を踏まえ、学びの場に応じた指導の充実
（2）個別の教育支援計画等を活用した学校間接続時における引継ぎの充実

Ⅰ　小中学校

1　通常の学級

【施策の方向（例）】
○ 特別支援教育の視点を生かした通常の学級における指導の充実

2　通級による指導

【施策の方向（例）】
○ 通級指導教室の適切な設置及び指導の充実

3　特別支援学級

【施策の方向（例）】
○ 学級の実態に応じた適切な教育課程の編成

Ⅱ　高等学校

【施策の方向（例）】
○ 特別支援教育の視点を生かした指導及び高等学校の通級による指導の充実

Ⅲ　特別支援学校

【施策の方向（例）】
○ 障がいの重度・重複化及び多様化に対応した専門性の向上及び特別支援教育のセンターとしての役割の発揮

Ⅳ　一貫した継続性のある指導及び切れ目ない支援

【施策の方向（例）】
○ 学校間接続時の連携の充実

個別の教育支援計画等による学校間の引継ぎ100%を目指します。

柱3　卒業後の自立と社会参加を目指した支援の充実　P24

第Ⅰ期推進プランの成果と課題

・デュアルシステム型現場実習等による、関係機関との連携の促進
・生徒の多様なニーズに沿った実習先・就職先の新規開拓と就職後の早期離職の改善

主な改定のポイント

・ICTを活用した就職支援の充実
・新たな職域に対応した専門教育や職業教育の充実

【施策の方向】

（1）キャリア教育の充実
（2）職業教育の推進
（3）関係機関等との連携の強化とICTを活用した就職支援の充実
（4）学校卒業後に向けた引継ぎ及び移行支援の充実
（5）社会体験活動、障がい者スポーツ、文化芸術活動の推進

柱5　専門性の向上と支援体制の整備・充実　P28

第Ⅰ期推進プランの成果と課題

・特別支援学校教諭免許状の取得率向上
・特別支援教育に関する専門性の向上
・教員のICT活用指導力の向上

主な改定のポイント

・特別支援教育を担う人材育成
・教員の特別支援教育に関する基礎的理解の促進
・教師に求められるICT活用指導力の向上

【施策の方向】

（1）特別支援教育を担う人材の育成及び専門性の維持向上
（2）組織としての専門性の強化及び支援体制の整備・充実
（3）教師に求められるICT活用指導力の向上

３　筑紫地区の中学校特別支援学級の状況と課題

福岡県筑紫地区には、22校の中学校に特別支援学級が存在する。福岡県の現状で述べた通り、各学校では特別支援学級は増加し、生徒の数も増えている。

また、特別支援学級の生徒が増加に伴い、通信・サポート校を含め、進路先の学校数は増え、さまざまな学校に進学している。特に、全日制への高等学校への進学数や進学先も多様化している。進路指導に関しては、進路説明会、保護者会、面談等で生徒の状況に応じた進路指導を行っているが、どのような進路指導が生徒にとって良いのか、各学校の悩みは多岐に渡る。さらに、生徒の将来の見通しや自立を踏まえた進路指導がおこなえているかが課題である。

筑紫地区の進路状況を見ると、近年５か年で全日制の高等学校への進学は、36%から48%に増え、その中でも、公立高等学校への進学希望は年々増えている。

全日制の高等学校への進学を希望している生徒が増えてきた背景には入試の多様化もあるが、保護者の要望も大きい。しかし、「なぜこの高等学校を希望したか？」の問いに明確に答えられる生徒は少なく、将来の自立を考えた進路希望につながっているのかは不明である。以下の表は筑紫野市の中学校の特別支援学級５か年の学級数である。学級数はどの学校でも横ばいか増加しており、各学校とも特別支援学級在籍生徒、クラスも増加している。

令和6年５月１日現在
※(　)内は特別支援学級内数の数値

	年　度	R2	R3	R4	R5	R6
A	生徒数	798(29)	809(29)	811(35)	830(27)	802(34)
	学級数	28(7)	28(7)	28(7)	26(5)	26(6)
B	生徒数	534(18)	529(21)	532(23)	577(34)	579(34)
	学級数	17(3)	18(4)	18(4)	21(6)	21(6)
C	生徒数	643(24)	700(33)	680(36)	662(42)	622(49)
	学級数	22(5)	24(6)	24(7)	23(7)	23(8)
D	生徒数	316(7)	341(12)	322(19)	337(23)	333(20)
	学級数	11(2)	12(3)	12(3)	13(4)	13(4)
E	生徒数	636(15)	628(13)	657(20)	673(24)	672(25)
	学級数	21(4)	20(3)	22(4)	22(4)	22(4)
計	生徒数	2,927(93)	3,007(108)	3,002(133)	3,079(150)	3,008(162)
	学級数	99(21)	102(23)	104(25)	105(26)	105(28)

図５　令和６年度　筑紫野市教育要覧　より

また、進学先の学校の数も増加し、特別支援学級担任は、進路支援が生徒のニーズに合っているのかが課題として出てきた。進路の課題は、各学校とも課題としてとらえており、どのような進路指導が生徒の自立や就労への意識につながっていくのか検討してく必要がある。

筑紫地区では、特別支援教育　中学校部　という組織を活用し、進路指導に特化した研修会や進路の研修会を行っている。本年度は、以下の年間計画で取り組んでいる。

表１　筑紫地区特別支援中学校部会　年間計画

	内容
第１回　総会	・昨年度の進路状況の共有 ・各学校別に進学状況の提示 ・各学校の生徒数推移
第２回　研修会	・特別支援学校（聴覚支援学校　高等学園）進路説明会 ・私立高等学校進路説明会
第３回　アンケートのみ	・進路状況調査（進路希望調査）
第４回　評価について （他市の研修会に参加）	・評価について
第５回　進路アンケート	・最終進路状況調査（進路先の確認）
第６回　進路状況確認会	・アンケートを集計し、入試の動向や進路先の傾向を共有

進路に関するアンケートの集計結果を年度初めに冊子にし、進学先の高等学校の情報、面接の内容、知っておいた方がよい入試の情報を共有している。その冊子は、進路指導や入試の動向を掲載しており、７月から始まる三者面談等（生徒・保護者・特別支援学級担任・交流学級担任）に活用できるように進路指導に導入している。尚、アンケートに関してはプライバシーに配慮して行っている。

今後は、小学校と合同で、進路指導に関係する研修会や高等学校の先生を招き、進路についての研修会を開催していく。小学校の特別支援教育担任は進路についての研修会も少なく、進路のことを保護者から問われてもなかなか最新の情報を保護者に提供することは難しい。また、聞きたいときに中学校の先生に聞くことができないことも課題である。中学校側はできるだけ最新の情報や入試の方向性を伝え、連携する必要がある。地域の小学校との連携を密にしながら、進路の話を含め、特別支援教育を推進していくことである。

４　本校の現状と課題

（１）小中連携の取り組みから

本校では、切れ目のない支援という側面からも、３年前から小中連携が重要であると考え、「中学校の特別支援教育の内容や進路、中学校入学までに必要なこと。」を保護者会で話をしている。保護者会を行う理由は、

①本校の特別支援教育を保護者に理解してもらうため。
②中学校卒業後の進路や就労について情報提供を含めた、見通しを持ってもらうため。
③生徒の支援は学校だけではなく、家庭と協力して行っていく必要があるため。

以上の３つを中心に話をしている。進路に関しては毎年、入試の状況は変化し、多様化していることを伝えている。保護者の高等学校への進学希望は高く、「特別支援学級で全日制の高校を受験できるのか。」「特別支援学級に在籍していることが、進路の妨げになるのか。」といった疑問からも保護者の高等学校進学への関心が高いことがわかる。もちろん、中学校の特別支援教育で中

学校に入学して３年後には自らの進路を見つけ、その進路に向けた学習や生活を見通して学校での支援を行っていく必要があるが、保護者も子どもの特性を理解し、子どもが自分の特性や得意・苦手、どんな将来を思い描いているのかを理解している保護者ばかりではなく、どのように理解や支援をすればよいのかがわからない保護者もいる。

次のスライドは、小学校の保護者会で使っている資料である。高等学校の情報を伝えつつ、中学校の特別支援学級での学習内容やどのような力をつけたいと考えているのかを説明し、進学だけではなく、高等学校卒業後の自立に向けた話をするようにしている。課題は情報量が多くなり、保護者や小学校の先生方に中学校の特別支援学級の学習内容等が伝わっているのか。また、本当に保護者が知りたい情報を提供できているのか内容を精査する必要がある。

図６は、保護者会で、ご家庭にお願したいことの説明である。発達に課題を持つ生徒は、注意をされたり、叱られたりすることが多く、「自分はダメだ…」と思い悩む生徒徒も少なくはない。そこで、少しでも褒める場面を持ってほしいことを伝えている。

また、少しでもできたことは大げさに評価し、良い行動を増やすことができるように行動に対しての評価をお願いしている。

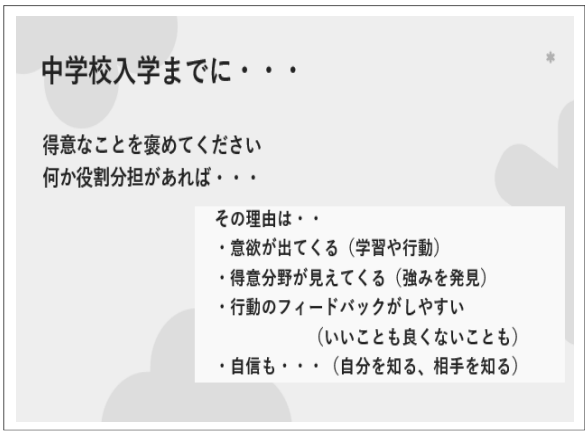


図６　お家でお願いしたいこと

図７は、高等学校の先生方に話を聞いたことを参考に作成し、将来に必要な力をつけるためには、日頃の学校生活が大事であることを説明している。一例を出すと、自己理解の方法の一つに、プリント整理がある。プリントを整理するのが得意なのか、不得意なのか、苦手であればどうすればうまくいくようになるのかを考え、次の行動につなげていく。考えて行動できることが、成功体験や次の目標や行動につながり、ポジティブな行動が増える。行動をフィードバックする必要があるため、少しの変化でも声掛けをしていくことが重要であることを伝えている。

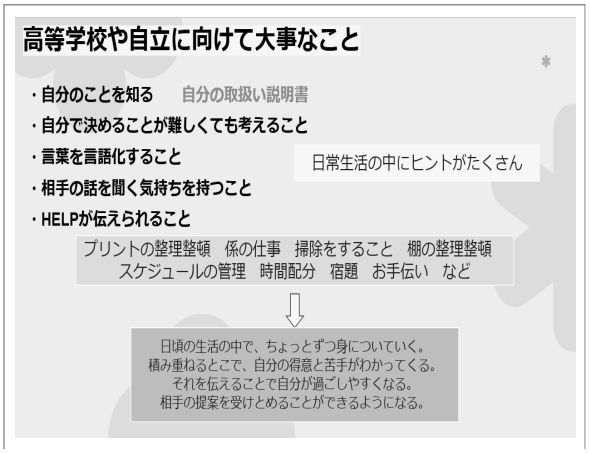


図７　将来必要な力を日常生活で習得する①

図８は、特別支援学校の先生に進路につながる話をしていただいた際、その内容を自立や就労に向け、学校生活に変換した図である。どの場面で力をつけることができるかを説明しており、この内容は学校だけではなく、家庭でも取り組むことができる内容だと考える。全部のことを取り組めなくても、毎日の繰り返しが、生徒の力につながっていくことを伝えている。成果はすぐにでなくても、力になっていくことを伝えている。

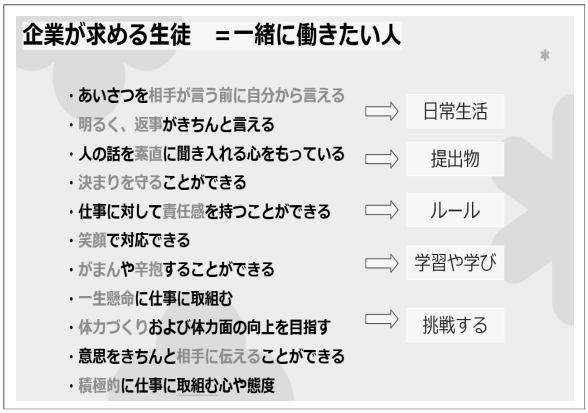


図８　将来必要な力を日常生活で習得する②

図９は、特別支援教育は、学校だけでも家庭だけでも難しいことを伝え、生徒を真ん中に据えた支援を目指していることを伝えている。**図８**でも説明しているが、特別支援教育は学校だけでの支援は難しく、家庭と学校が生徒を中心に支援に取り組んでいかないと生徒の成長を促せないと私は考えている。学校と家庭が力を合わせて支援していくことを伝えている。

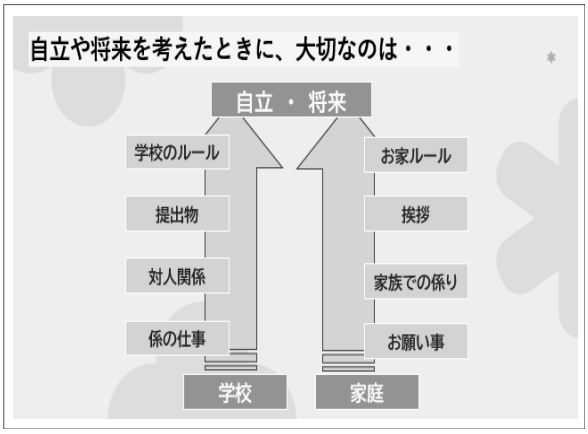


図９　家庭と学校の連携について

図10は、本校が特別支援教育で身につけたい力を示している。本校が何を目指し、大事にしているのかを知ってもらうためには、伝えておくことは大事である。特に、生徒の土台となる「自分のことを知る」ことは学校生活や将来に必ず役に立つ力であると同時に、何事にも基本となる部分であることを伝えている。

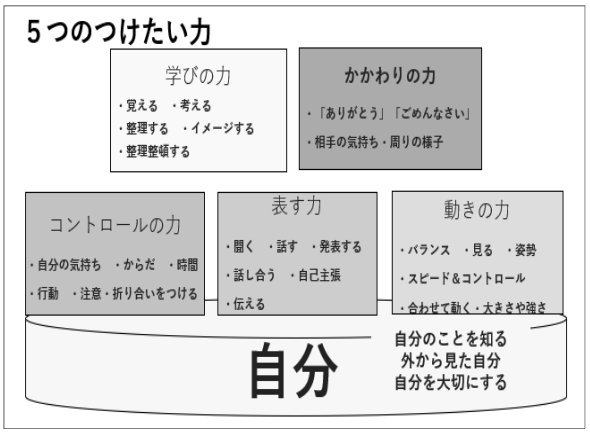


図10　本校の特別支援学級でつけたい力

この説明会の成果は、

・本校に進学する小学校に本校の特別支援教育についての説明が統一して行えること。
・本校の特別支援学級でつけたい力を保護者に伝えられること。
・中学校卒業後の進路についての情報提供を保護者と小学校の先生に伝えられること。
・中学校への相談がしやすい環境づくりの１つであること。

以上の４点が挙げられる。この取り組みは内容を深化させながら、今後も継続していく。

（２）特別支援教育コーディネーターとして

①特別支援教育コーディネーターの役割

国立特別支援教育総合研究所によると特別支援教育コーディネーターの役割は、「それぞれの学校で特別支援教育を推進することです。 特別支援教育に関わる教育活動は多岐にわたりますが、その各プロセスで、関わり合う人達を繋ぎ、知恵と力を引き出し、児童生徒への支援に結びつけていくことです。」とある。

次の図は特別支援教育コーディネーターの役割を示したものである。校内委員会をはじめ、学年、担任との連絡・調整、保護者の相談窓口、関係各所との連携と支援の動きは多岐にわたる。特に、本校では、交流学級や特別支援学級の先生との連携・周辺中学校の特別支援学級担任との連携、ケース会議の３点に重点を置き、生徒支援を行ってきた。

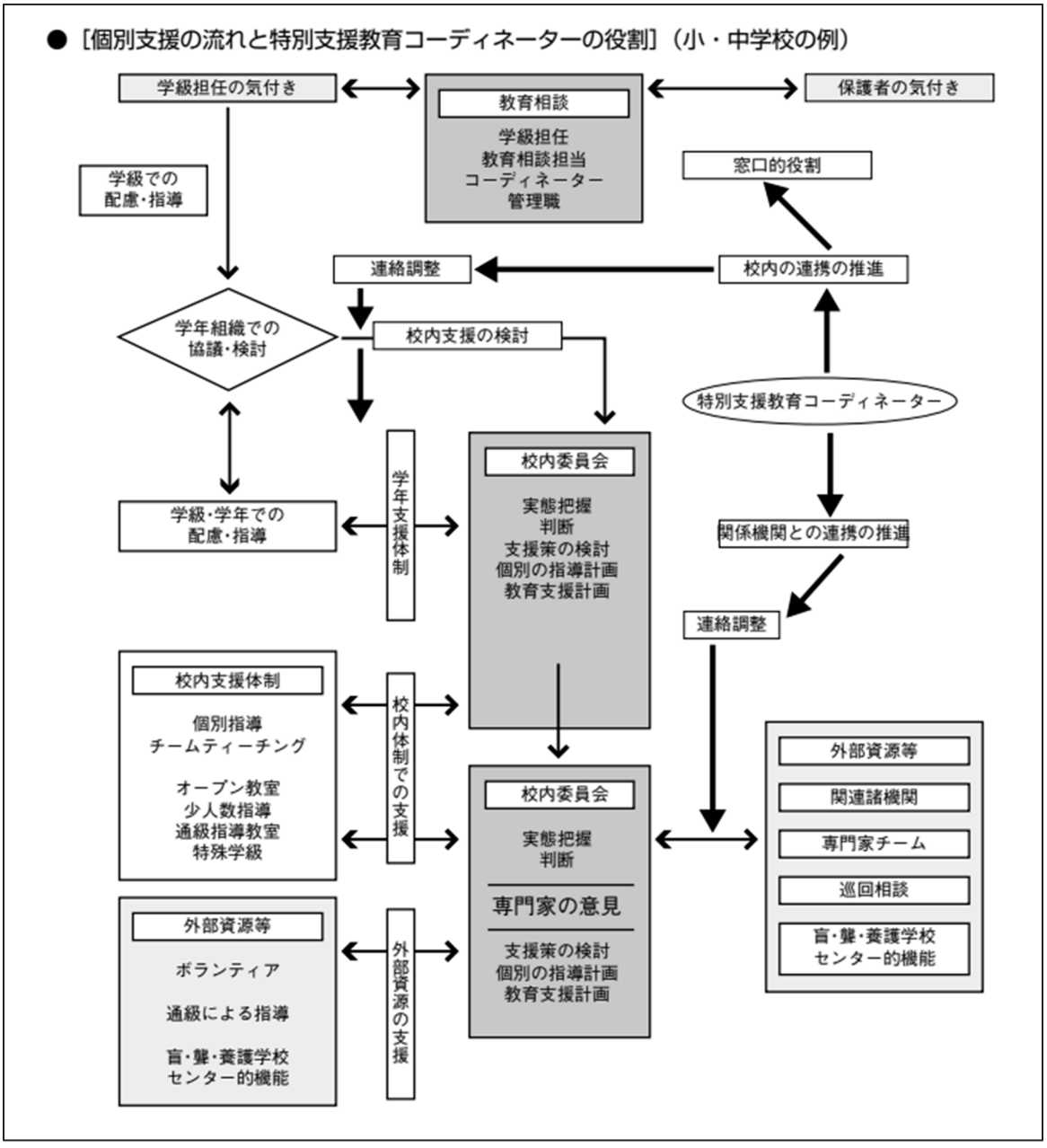


図11　国立特別支援教育総合研究所　ＨＰより

特別支援教育コーディネーターとして、他校の先生方とかかわることが多く、支援に関わる悩みが尽きないことが研修会を通して知ることができた。先生方は、様々な視点から支援方法を模索し、真剣に取り組み、保護者とも関わりながら、児童生徒を自立に向かわせるべく、日々の授業に取り組まれている。

研修会では小学校の特別支援に関わる先生方とも情報を共有し、悩みの中心は「生活習慣の確立」「学習規律の定着」「学習内容の積み重ね」「学習支援の方法」であった。その中には、中学校卒業後の進路についての質問も多く、進路については小学校で話をする必要があることも分かった。

特に小学校の自閉・情緒支援学級は、気持ちの安定が学習の定着や生活の安定につながることが多く、低学年から高学年までと発達段階も個人差が大きい。どこに学習の中心を置くのかが支援のポイントになるため、悩みは多岐に渡る。

中学校の先生方の悩みの中心は「学習の定着」「保護者とのかかわり」「情緒の安定」「自立に向けた進路指導」「将来の見通しをどのように持たせるのか」と小学校と同様に多岐に渡る。「将来の見通しや就労に関して」については、多くの先生方が悩んでいる。進路に関して、支援方法を共有しても、個別の対応になるため、すべての生徒に当てはめるのはむずかしい。先生方の悩みや話をしていく中で、キャリア発達課題の中に示されている「自己理解」の力を中学校在学中の３年間でつけるべき力のひとつだと捉えることができた。

さらに、特別支援教育の課題は研修会等で共有できるが、そこから今後をどのように取り組んでいけばよいのかを話す場が少ないことも事実である。本来であれば、個別の対応をしている状況で、よりよい支援方法を提案し、実践をしていくことが理想である。支援側は、先を見据えた支援の方法を数多く共有・実践していれば、どのような生徒にかかわっても支援方法を提供することができ、一緒に取り組むことができる。成功したこともうまくいかなかったことも情報として共有しておけば、Aの生徒にはうまくいかなくても、Bの生徒にはうまくいくかもしれない。悩みが多岐に渡る困難さはあるが、その分様々な支援方法もたくさんあると私は捉えている。

５　生徒自身による進路選択の課題

生徒の進路選択の現状は、支援側の情報提供やインターネットの情報、保護者の支援によって選択していく場合が多い。教師は生徒の希望や日常生活の中で、一番良いと思われる進路情報を提供し、生徒と進路確定に向けて話し合いを進めていくが、保護者との面談で決まる場合と保護者の強い意志による進路変更も少なくない。生徒自身の進路の意思決定に関しては、自分で決める意思決定が必要であるが、意思決定の力をつけるには、選択だけをさせていく支援を行っていくのではなく、発達に課題がある生徒に対して、就労や自立に向けて、「自己理解」や「意思決定」「言語化」の力を同時に引き出していく必要もある。教師には目標設定や目標に向かわせる力や手立ても必要な資質であるといえる。そこで、教師は実行機能を視点とした支援、生徒は実行機能が備われば、自分の進路に関して自分で考え、言葉で伝えることができるのではないかと考えた。高山恵子先生の実行機能の著書に「実行機能をアップする37のワーク」では、実行機能を８つの要素としており、その機能は進路選択だけではなく、将来の自立に向けての力となると考えた。

表２　高山　恵子　氏　著書　実行機能をアップさせる37のワーク　合同出版　より　抜粋

８つの実行機能の要素と説明

①起動（やる気スイッチ）

言葉の通り、やる気を起こすきっかけです。環境を整え、自分に合ったやり方を模索する力です。

②計画立案

行動を決めるプランニング機能で、物事の優先順位を決めて、それを最適な方法で実行するプランを立てる能力です。行動を効果的に行う上でとても重要な能力です。物事の優先順位を決めるには、さまざまな情報を集めた上で、どの順番に実行していくのが良いかきめるわけですが、やりたくないことを先にやったり、逆にやりたいことを後回しにしたり、あきらめることも必要になってきます。実行できない計画を立てない、という力も必要です。

③時間の管理

プランニングにも関係することで、いつやるのか（実施する時間）どういう時間配分でやるのか（時間の使い方と優先順位）といったことのほかに、時間を見ながら行動を調整する、ということも含まれています。

④空間や情報の管理

これはどういった環境を調整すれば効果的に行動ができるのか、それを調整することです。そのなかには、どこに何があるのかを把握することや必要な情報を管理して、特定の場所に保存するといった情報の管理も含まれます。ものの分類や整理整頓はもちろん、心地よい空間を保つというのも作業をする上では重要です。

⑤お金の管理

これにはさまざまな能力が含まれています。たとえば、お金は計画的に使う必要がありますので、先を見通す力が必要です。損得も大いに関係するので、感情をコントロールすることも必要になります。その他に、自分のお金がいくらあるのか、という実態をモニタリングする必要もあります。

⑥切り替え

感情抑制機能の事です。何に対してもすぐに感情を爆発させると、多くの場合、人間関係がうまくいかなくなったり、自分に自信をなくしたりする状況に陥ることがあります。あるときは我慢したり、あるときは怒ったりと場面や人間関係など、さまざまな情報を一瞬で処理して、自分の気持ちをコントロールする必要があります。気持ちを切り替えるには、その前に自分の「いまの感情」に気づくことが必要になります。感情の気づきには、体性感覚（特に汗をかく、体が熱くなる、などの皮膚感覚）のほかに、内受容感覚（心臓の鼓動や体の中のゾクゾク感、胃がキリキリする、などの内臓感覚が重要でこうした感覚に気づきやすい人ほど自分の感情に気づき、評価することができるようです。

⑦ワーキングメモリー

現在の情報と過去の情報（記憶）を一時的に頭の中に留めておく機能です。目標を達成するためには、もっとも最適な行動を選択することが必要です。行動を選択することが必要です。

行動を選択する際には、自分の記憶から関連した情報を引き出してそれを参考に行動します。また、人と会話をするときには、言葉の意味を理解して、会話の内容を一時的に脳で保存しておき、会話に関連した記憶を長期記憶から引き出して新しい情報を書き換えて保存する必要があります。普段脳に入力される情報の９割ほどは相手の仕草や表情、周囲の風景などの視覚情報と声や環境音などですが、不要なものは記憶として保存されずに処理されます。

⑧集中と抑制

どの情報が必要でどの情報が不要かを取捨選択し、不要な情報を抑えたり、緊張事態が発生した時にすぐにその事態を処理するために注意や思考を切り替えたりする能力です。実生活場面では、感情も伴う状況が多いため、感情の制御（今の自分の感情に気づいたり、興奮を抑えたり、場に応じた適切な感情を表出する、など）も重要になります。

この８つの実行機能の要素の中で、［　　］で囲んだ部分は、進路の意思決定を行うにあたっても必要な力であると同時に、「自己理解」「自己決定」「言語化」につながり、将来を支える力となっていくと考える。よって、実行機能を視点とした実践に取り組んでいく。

下記の図は高山恵子先生の著書を引用したものである。

著書では、神経心理学者のレザック博士の「４つの要素」を基本に考えている。

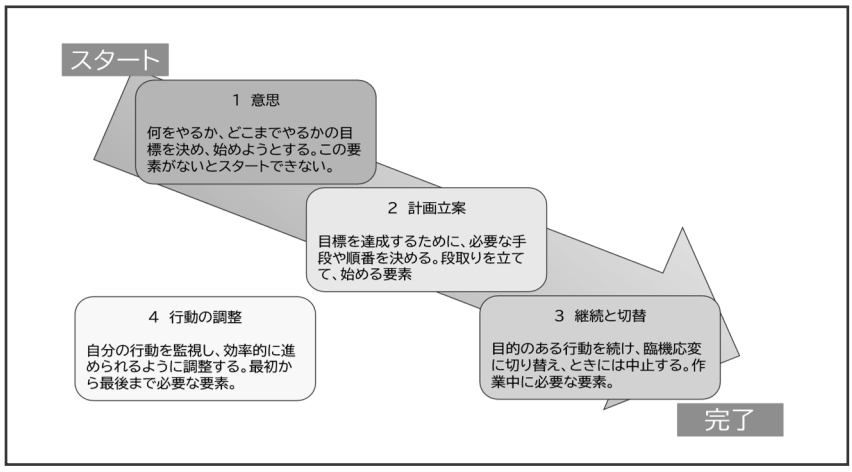


図12　高山恵子　氏の実行機能の説明を示す図

高山　恵子氏は「意思」に含まれる機能として、①目的の明確化　②動機づけ　③自己環境の認識の３要素を分けている。また、４つ目を④行動の調整と位置づけている。

①目的の明確化は、やる目標を定めることからつまずいており、発達に課題がある生徒の中にもやらなければいけないことを後回しにして、できないことで感情のコントロールができず、結果、自分は何もできないという自己肯定感が下がることにつながっている。支援側は、生徒の特性をしっかり捉え、どこに目標を持たせ、やる気を持たせるのかは非常に大事な部分である。また、生徒側も自分の良さや苦手な部分を理解しておく方が目標を立てやすいと考える。

②計画立案は、自分の目標達成のためには、どのような情報を集め、どの情報を取捨選択するのかが重要になる。ここで情報を取捨選択するためには自分で決めることが必要になり、どこを選択すればいいのかを考えていく力が必要になる。

③継続と切り替えは、実際に目標や行動が決まり、実行していく過程で、スケジュールや最後までやりぬく力をもち、状況によっては中断や中止をする意思決定や自分の行動のコントロールが必要である。これは、自分のことを理解し、中止や中断を判断する力と、それを相談したり、自分の状況を相談したりすることにもつながっていく。

④行動の調整は、自分の客観的に捉え、自己の行動を認識することであり、より効果的な行動になるように欲求や感情をコントロールする力も必要になる。客観的に自分を捉えることは、日頃から自分の行動を振り替えられる取り組みを行っておくことが重要である。

実行機能の４つの要素から、本研究において、実行機能の要素の視点を取り入れ、生徒の将来や就労・自立の社会参加に向けた取り組みを実践する。

第２節　研究の目的

特別支援教育コーディネーターと通常学級・特別支援学級担任が協働して生徒の進路先の意思決定を促す取り組みを整理・実践するとともに通常学級や特別支援学級担任の参考となる資料の提供をする。

第２章　研究の実際

第１節　生徒の進路選択の意思決定を促す取り組みの整理

１　筑紫地区中学校特別支援学級担任へのアンケート調査

（１）目的

特別支援学級に在籍する生徒が、進路を決定するときに、進路指導を始める適切な時期を検討・調査を行う。また、進路指導を行う時の難しい点を自由記述で書いてもらい、情報を共有する。その際、特別支援学級担任が進路支援を行う上で、大事にしている点をまとめ、課題の整理と支援の方法を考える。

（２）対象

筑紫地区特別支援学級担任

（３）方法

グーグルフォーム

（４）内容

①進路指導を始めたほうがいい時期

②実際に進路指導を始めた時期

③進路指導で難しく感じるところ

④進路指導で大事にしていること

⑤進路指導での悩み

（５）時期

2024年９月

（６）倫理的配慮

調査は今後の進路指導に役立てるために活用、分析を行う。

２　校区小学校特別支援学級担任・保護者アンケート調査

（１）目的

中学校の特別支援教育コーディネーターから中学校の特別支援教育や進路について話をすることの利点や今後の希望や日頃の悩みの共有を行い、小学校と連携した支援を行っていくための調査。

（２）対象

本校校区内小学校特別支援学級担任・本校校区内特別支援学級在籍児童保護者

（３）方法

アンケート用紙

（４）内容

特別支援学級担任

①中学校側から中学校の特別支援教育に関する説明を行うことについての意見

②特別支援教育での悩み

③進路指導について

保護者

①本日の研修の感想や意見

②進路についてわからないこと

③進路について難しいと感じるところ

尚、アンケートについては保護者の意見を聞きだすことが重要と考え、記述式で実施した。

（５）時期

2024年　９月　11月

（６）倫理的配慮

自由記述で本調査を行い、調査結果に関しては、プライバシーに配慮している。

３　本校の特別支援学級卒業生へのアンケート調査

（１）目的

中学校を卒業後、特別支援学級在籍であった生徒に、高等学校進学後や高等学校卒業後の生徒の状況を知ることや高校生活の様子を踏まえた内容で実施した。

（２）対象

高等学校１年～３年　18歳

（３）方法

選択肢から選ぶ項目と記述式のアンケート

（４）内容

①高等学校に進学して、次の進路（将来）を考えたときに中学校で身に付けておいた方がよい力は何ですか？

②進学先やアルバイト先で必要な力は何ですか？

③後輩に伝えたいことがあれば自由に書いてください。

（５）時期

2022年４月～2025年３月

（６）倫理的配慮

本調査ではプライバシーに配慮して行われている。

４　高等学校へ情報収集のための訪問

（１）目的

高校進学を考えたときに、中学校特別支援学級でどのような力をつけて卒業すれば、生徒が進学に伴う環境の変化に適応していくかを調査、検討したいとして、３つの高等学校に訪問した。

訪問する高等学校は、近年、進学希望が多い公立高等学校とし、３校とも特色がある高等学校に訪問した。

（２）対象

Ａ高校…単位制の高等学校、自己の特性や将来設計に沿ったきめ細やかな指導を行っている。

Ｂ高校…公立高等学校、生徒の特性や合理的配慮を職員が共有し、日常の学習指導や生活指導に積極的に取り入れ、細やかな支援を行っている。

Ｃ高校…合理的配慮の提供と通級による指導を行っている。通級指導を活用した支援と拠点校として、学校や関係機関とつながり支援側への細やかな支援を行っている。

（３）方法

各学校への訪問

（４）内容

①各学校の特徴　カリキュラム等　特色ある教育課程

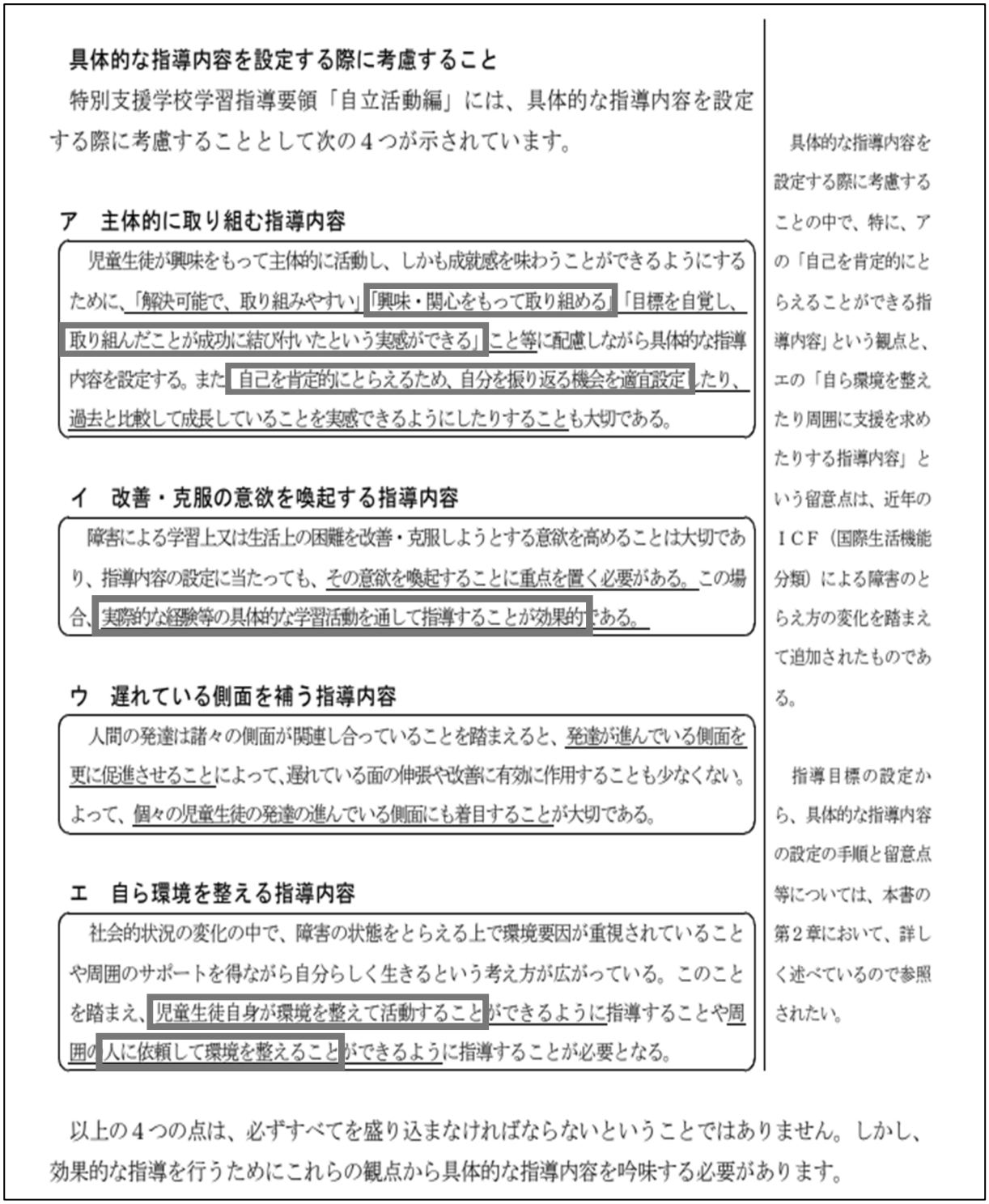
②合理的配慮について

③発達課題がある生徒への配慮

④高等学校入学までにつけておいた方がよい力

第２節　実践

実行機能を視点においた授業を行うにあたり、自立活動の時間を使って、実践を行った。以下の**図13**にある自立活動の具体的指導内容を参考にしている。実践１では個別対応と個別の課題から学校行事を活用し、課題を解決しつつ、集団で取り組む実践を行っている。



具体的な指導内容を設定する際に考慮すること

特別支援学校学習指導要領「自立活動編」には、具体的な指導内容を設定する際に考慮することとして次の４つが示されています。

ア　主体的に取り組む指導内容

児童生徒が興味をもって主体的に活動し、しかも成就感を味わうことができるようにするために、「解決可能で、取り組みやすい」「興味・関心をもって取り組める」「目標を自覚し、取り組んだことが成功に結び付いたという実感ができる」こと等に配慮しながら具体的な指導内容を設定する。また、自己を肯定的にとらえるため、自分を振り返る機会を適宜設定したり、過去と比較して成長していることを実感できるようにしたりすることも大切である。

イ　改善・克服の意欲を喚起する指導内容

障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲を高めることは大切であり、指導内容の設定に当たっても、その意欲を喚起することに重点を置く必要がある。この場合、実際的な経験等の具体的な学習活動を通して指導することが効果的である。

ウ　遅れている側面を補う指導内容

人間の発達は諸々の側面が関連し合っていることを踏まえると、発達が進んでいる側面を更に促進させることによって、遅れている面の伸張や改善に有効に作用することも少なくない。よって、個々の児童生徒の発達の進んでいる側面にも着目することが大切である。

エ　自ら環境を整える指導内容

社会的状況の変化の中で、障害の状態をとらえる上で環境要因が重視されていることや周囲のサポートを得ながら自分らしく生きるという考え方が広がっている。このことを踏まえ、児童生徒自身が環境を整えて活動することができるように指導することや周囲の人に依頼して環境を整えることができるように指導することが必要となる。

以上の４つの点は、必ずすべてを盛り込まなければならないということではありません。しかし、効果的な指導を行うためにこれらの観点から具体的な指導内容を吟味する必要があります。

具体的な指導内容を設定する際に考慮することの中で、特に、アの「自己を肯定的にとらえることができる指導内容」という観点と、エの「自ら環境を整えたり周囲に支援を求めたりする指導内容」という留意点は、近年のＩＣＦ（国際生活機能分類）による障害のとらえ方の変化を踏まえて追加されたものである。

指導目標の設定から、具体的な指導内容の設定の手順と留意点等については、本書の第２章において、詳しく述べているので参照されたい。

図13　自立活動とは　　福岡県教育センター　より引用

①興味・関心をもって取り組める内容
②取り組んだことが成功に結びついたという実感ができる。
③自己を肯定的にとらえるため、自分を振り返る機会を適宜設定。
④実際的な経験等の具体的学習活動を通しての指導。
⑤周囲のサポートを生かして自分らしく生きるとともに人に依頼して環境を整える。

とあり、次の実践から「自己理解」「自己決定」「言語化」につなげる指導ができると考えた。

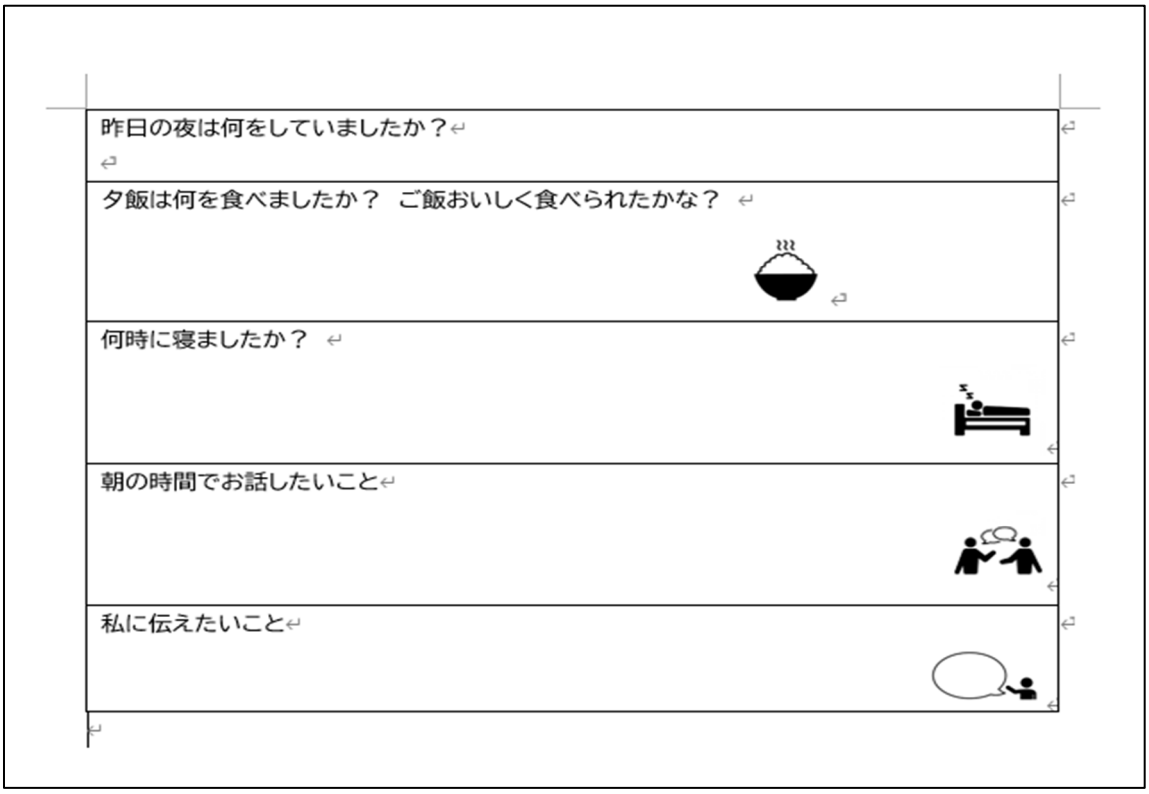
１　自立活動での指導実践（個別支援・集団支援）

（１）朝の時間を使った、行動のフィードバック

生徒の困り感の中に、「自分の感情をコントロールする。」「自分の気持ちを表現する」ことが難しい生徒が多く、不適応を起こし、落ち着くまでに時間がかかる。生徒も感情的になり、自分の気持ちをコントロールできないことへの焦りや戸惑い、自尊感情の低下が見られる。

そこで、朝の時間を活用し、自立活動を使って、自分の行動のフィードバックができる活動を仕組んだ。朝、登校し、昨日の家での様子から話を聞くことから始める。話を聞くポイントは次の通りである。最初はワークシートを使わず、教師がメモを取り、生徒に返していく方法で行った。慣れてきたころ、自分で記入する形に変え、フィードバックしていった。

表４　支援側・生徒が使える振り返りシート



（２）次の表は生徒の実態から、この実践で目指すところを設定し、教師や生徒が理解した上で実践を行った。また、交流学級の担任にも情報を共有する。生徒とかかわる教師が情報を知っている強みは、情報を知ることで、さまざまな声かけや、視点をかえた支援を行えるからである。

表５　生徒の困り感と実践後の変容

	A	B
目指すところ	・自傷行為をなくす ・自分理解と気持ちの言語化 ・相手との交渉	・自己表現と言語化 ・自分理解 ・意思決定
困難さ、困り感	・感情をコントロールできなくなると、自傷行為が始まる。 ・家族とのかかわり方 ・他人への執着	・先が見通せない不安感 ・自尊感情の低下 ・感覚過敏 ・相手の気持ちがわからない
面談時間	30分～１時間	30分

（３）自立活動の時間を活用し、学校行事を計画的に取り組む実践

本校は小学校との交流事業で七夕会、クリスマス会を行っている。この行事の目的は、

①小学生に中学校での生活を少しでも体験してもらい、入学後の不安をなくす。
②行事を通して、中学生は自分の係に責任を持ち、自分たちで運営する。
③時間、内容など企画や司会は中学生が考えて、自分たちで行う。

の３点を目標に取り組んでいる。コロナ禍までは年に２回できていた行事だが、コロナ禍の３年間はクリスマス会だけ開催している。

（４）本番までの計画表

表６　クリスマス会までの授業計画

10月①	クリスマス会の内容を特別支援学級全体で考える会議を持つ。
10月②	昨年の映像を見直し、今年のテーマを決める。
10月③	日程の候補を教師と打ち合わせをして、案内状を作成する。
10月④	記念品の内容を決め、作成日程を考える。 ※昨年はひまわりのキーホルダー、今年はクリスマスツリーホルダー
11月⑤	司会進行、詳しい時間スケジュールの決定
11月⑥	記念品作成
11月⑦	本番にむけて、リハーサル
11月⑧	クイズの撮影、リハーサル②
12月⑨	前日準備、最終リハーサル

２　学年・学級担任・特別支援学級担と連携した支援

（１）生徒の様子や気持ちの変容を数値化し、自己理解や言語化に役立てる。

４月は各学年とも環境が変化し、特に新入生は、様々な面で学校の環境の変化に伴い、不適応を起こす傾向がある。４月５月は気持ちの不安定さが顕著に現れ、学校から足が遠のく生徒も多い。そこで、１クラスにおいて、生徒の様子と気持ちの変容を数値化し、グラフにした。その結果、次のことが見えてくる。表の中の数字は学年をあらわしている。

下のグラフは、４月から12月までのグラフである。７人の生徒の感情の数値が示されている。100に近いほど感情は安定しており、数値が下がると不安定さを示す。グラフで示すことで生徒の気持ちの状況も理解でき、クラスの状況もわかる。

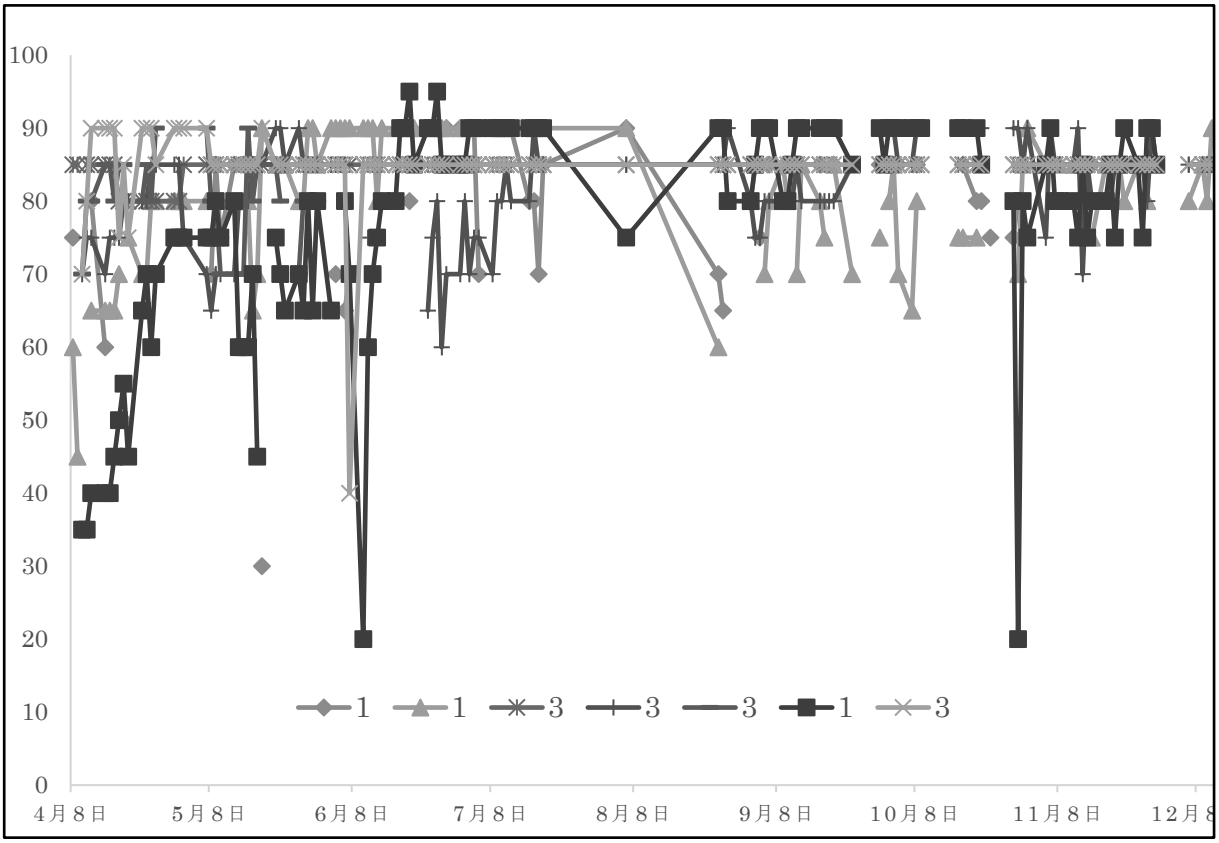


表７　自・情緒特別支援学級在籍生徒の気持ちの可視化グラフ

次のグラフは４月５月と９月10月を比較したものである。

（２）グラブの分析

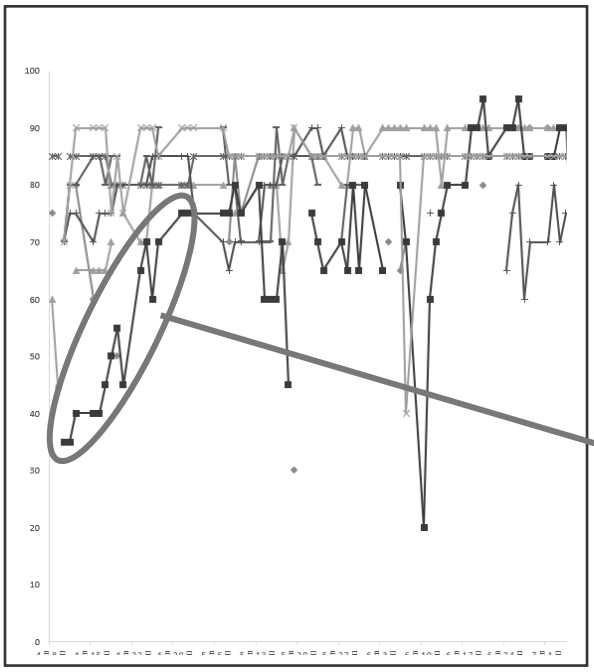


表８　４・５月の生徒の様子

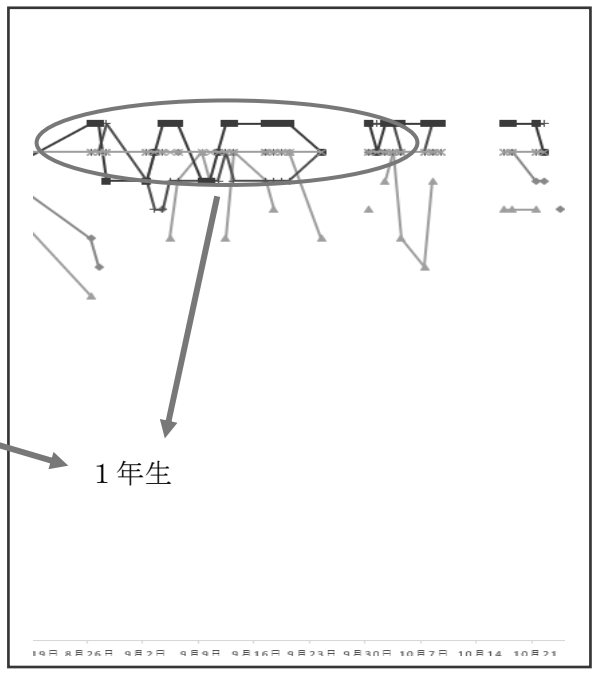


表９　９・10月の生徒の様子

２つのグラフを比較すると、４月５月の頃に比べると、９月10月はクラス全体が安定している様子がわかる。この時の学校行事や本人の様子を分析すると、グラフの乱れが大きいのは新入生であり、新しい環境への適応がなかなかうまくいっていない状況がわかる。安定しているのは上級生が多く、特に３年生は安定している。その理由は、学校の環境になれ、行事も先を見通すことができていると言える。また、この時期は体育会を控え、練習時間や時間割の変更など先を見通せない状況が重なり、全体的に気持ちが乱れがちだが、上級生は比較的安定していることがわかる。

９月10月のグラフは、多少の乱れはあるが、ほぼ安定している様子がわかる。安定している要因は様々考えられるが、一番は「学校生活への慣れ」が大きいと考えられる。１日の学校の流れがわかり、周りともコミュニケーションがとれ、不安な要素が軽減していると考えられる。このような分析からも、新学期初めは生徒の不安定さが見られることが多いことがわかり、教師側も支援の在り方を考えることができるグラフになっている。

このグラフの活用は、生徒のフィードバックだけではなく、教師側の実態把握とどのような場面が安定しているのか、又は、どんな時に不安定さが表れるのかを可視化でき、特別支援学級の担任だけではなく、どの教師が見ても分析しやすいグラフと考える。

第３節　通常学級・特別支援学級担任への参考資料の作成

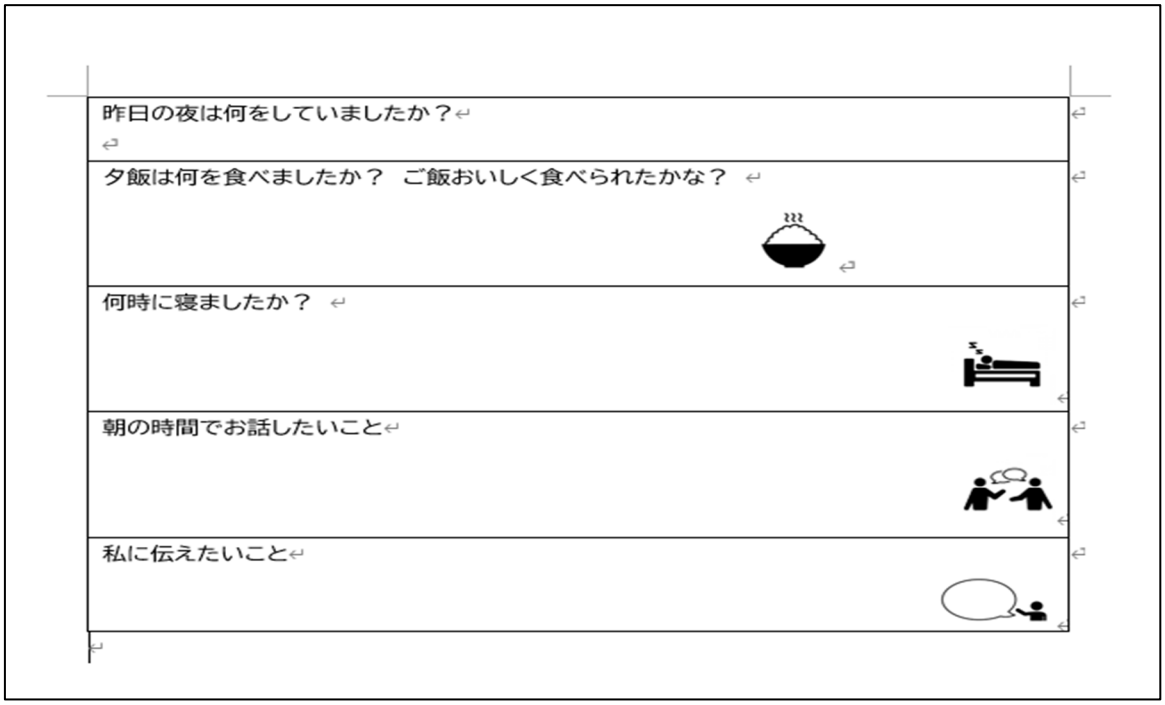


図14　生徒からの聞き取りシート

この表は、書きやすく伝えやすいことをポイントに作成している。書く内容が詳しいと教師側も理解しやすいが、長い文章などが苦手な生徒も多く、単語やキーワードで記入してもいいことにしている。単語でも表現してくれると、その意味や気持ちを聞くことができるので、話のやり取りができてくる。質問事項は何度が変更してみたが、質問内容は生徒が記入しやすく、記入した言葉から次につながるので、私はこの項目が一番生徒の気持ちを引き出しやすかった。

さらに、質問事項を変更するメリットは、様々な視点で、生徒の生活や気持ちを引き出すことが可能になると考えている。質問の内容が難しい生徒には、絵を描かせたり、コップを使って気持ちを表現したりした。生徒によっては、絵に気持ちが引っ張られることもあったので、私はピクトグラムで示すこともあった。

様々な項目で質問をする理由は、生徒がどのようなことに興味を示し、どのようなことに引っ掛かりや不安定さを感じることがあるのかの分析にもつながる。また、聞き取りシートは生徒の状況を知ることにも活用できるが、生徒のアセスメントにも活用できる。振り返りをする点でもメリットはある。この表を使って、今の気持ちと以前の時の気持ちの違いを認識させることもできる。今の気持ちと以前の気持ちの何がどのように違うのかを聞くことができ、言葉にすることで言語化にもつながっていく。

このシートには私のコメントも書かれており、表情、気持ちのモヤモヤ度、褒めるポイントも記入している。どうしても生徒が記入をできないときには、記入できなかったことを書いて、次の日にフィードバックしている。

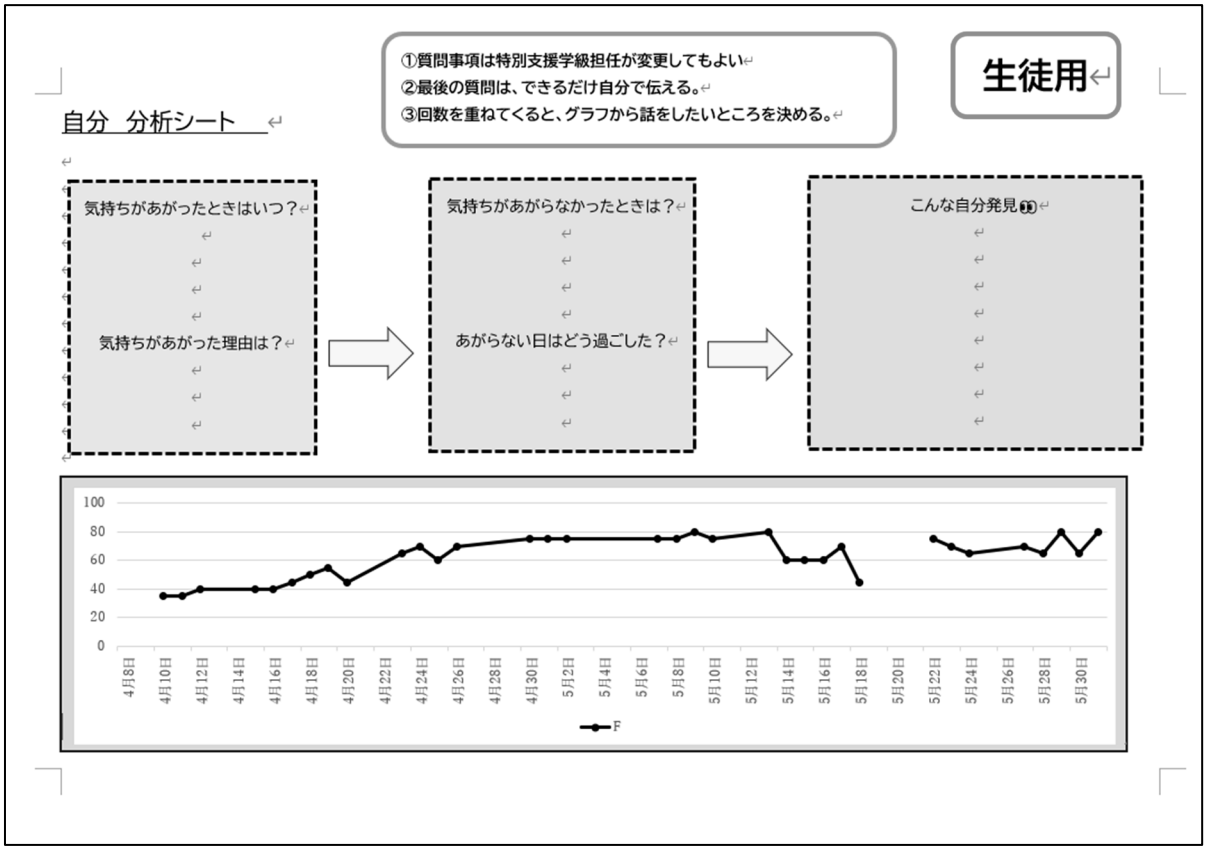


図15　自分分析シート

この分析シートのポイントは、生徒が記入する文字が少ないことがあげられる。はじめは記入することに消極的であり、１単語から始まることがほとんどで、記入することができない。この取り組みを進めていくと、記入する単語が増え、かけるようになることはもちろん、自分の感情の波を整理し、冷静にその時の自分を振り返ることができる。

取り組みのはじめは、教師が生徒に対して、質問をしながら記入方法や表現方法を伝えていくことから始まる。記入ができないときには、無理をせずに記入できなかったことを記入して残しておく。

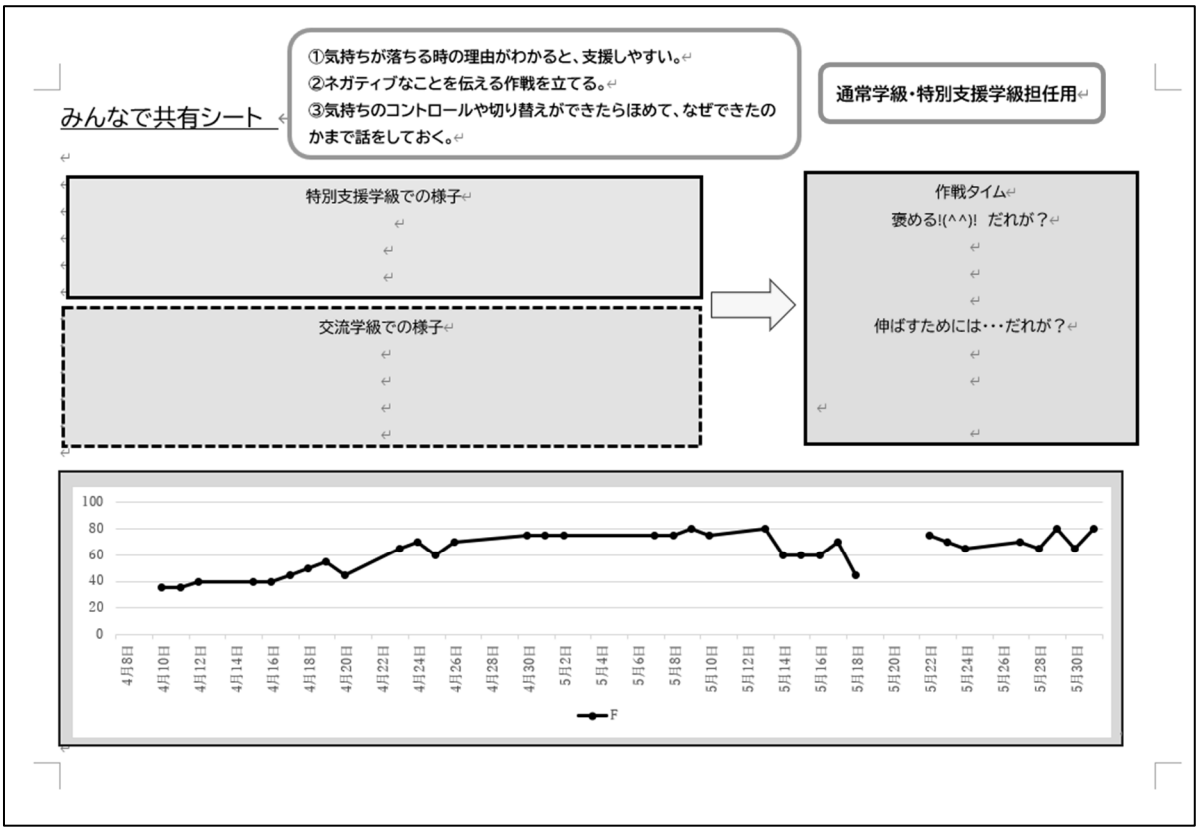


図 16　あしたにつながる共有分析シート

この分析シートのポイントは、交流学級担任の先生と特別支援学級担任との情報共有に活用することができる簡潔なシートである。質問事項は、その時の特別支援学級の担任が交流学級の担任に共有しておきたい内容を記入し、話をすることができる。情報の共有は生徒を多角的に捉え、視点をかえた支援や声掛けができるようになる。実際に、この用紙を活用して、おこなった情報共有の場面では、これから先の支援の方向性を話すことができた。時間的にも長い時間かからず、必要なことを話すことができた。時間がお互いにとれないときも、必ず情報を共有する。交流学級担任は、文字だけではなく、グラフを見ることで、気持ちの変化を素早く読み取ることもできる。数値を入力するだけで、気持ちの変容をみられることは非常に大きな情報共有であり、ポイントをしぼった支援の話ができることは大きな成果である。

第３章　研究の結果

第１節　生徒の進路選択の意思決定を促す取り組みの整理

１　筑紫地区中学校特別支援学級担任へのアンケート調査

（１）進路指導を始めたら良い時期について

実際は早い時期からの支援が必要と感じている先生が多く、将来を見据えて進路指導を行っていく必要があるという結果であった。進路指導を始める時期は早い方がよいが、実際には中学校３年生からはじめる学校もあり、進路指導を始める時期は分散化している。中学校１年生から系統的に進路指導を進めている学校での進路指導の主な内容は、

①高等学校調べ。

②高等学校への学校見学。

③夏休みなどに進路説明会への参加。進路説明会への参加の理由は、実際に学校に行き、高校の先生との出会いや校風を体験することができるからである。

④職場体験や職業体験

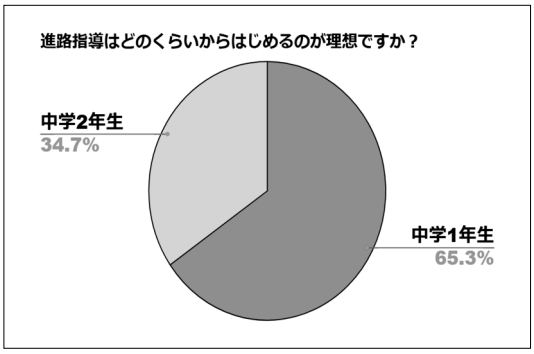


図17　進路指導を始めるとよい学年

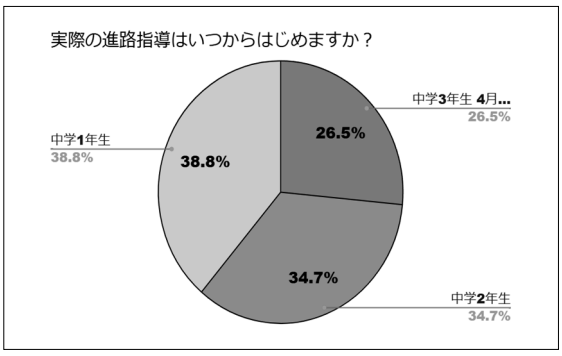


図18　進路指導を実際に始める学年

（２）中学校の特別支援学級担任の進路についての悩みは、多岐に渡る。次の表は、進路の悩みをまとめたものである。

表10　進路指導において難しいと感じるところ

進路指導において難しいと感じるところ	
本人が将来めざす姿が明確でない場合の進め方。	高校卒業後の進路を考えたときの高校選び。
本人の希望と保護者の希望との差	学力偏重になりやすいこと。
高校のしくみや受験の制度を生徒が具体的にイメージできるように提示すること。 どこに重きを置いて進路先を決定していくのか、子どもと保護者の意向を擦り合わせていくこと。	本人の考えと保護者の考えが違うこと。生徒の特性に合った学校を選択しても保護者の希望と違う時の対応が難しい。
コミュニケーションがとれるかの心配。	入学後に３年間すごせるか、先が見通せていないときの保護者への対応。

子どもが自分の力を客観視することが難しく、子どもが目標とする進路と現実的な進路がかけ離れていること。	進路を前にして、受験校が現実的ではなかったり決めきれなかったりするケースが見受けられる。
保護者の進路希望と生徒の実力や特性が合っていない時。	本人が卒業するための適正な進路であるか、常に悩みながら指導している。
毎年のように制度がかわり、理解が難しい中で生徒の将来を導かなければならないこと。	普通高校希望だが過去に前例がなく、支援の方向性がわからないとき
生徒の意識です。「入試」「高校生活」「高校での授業」などがイメージしにくいのではないかと思います。	先々、就労につながり、長く働けるためには、県立・私立高校などの一般受験なのか特別支援学校なのか、見通しをもった進路指導が難しい。
高校のあとの進路指導がどれくらい充実しているのか	高校に入った後のサポート体制がちゃんとしているのか

（３）進路指導で大事にしていること

表10から考えられることは、生徒が中学校３年間でできるだけ自分を理解し、進路を決めることが難しくても、向き合う姿勢を持つことができることである。その際、自分の気持ちを少しでも伝える事ができる生徒の育成を目指すことが、発達に課題がある生徒の将来を支える力になっていくと考えた。教師は、生徒の将来を見通した支援を行っていくために、様々な情報を集約し、提供しているが、その情報をどんな場面でどんな時に活用するかも課題のひとつである。

次の**図19**は、アンケートの中で特別支援学級担任が何を大事に進路指導しているのかを調査したものである。結果から言いえることは、特別支援学級担任は第一に本人の思いを大事にしながら、進路指導を行っていることころにある。中学校の特別支援教育担任は、高等学校に進学した後のことを考えている先生が多い。「卒業後は就職か進学か。」「中学校で支援をしてもらっていたところを高等学校ではどのように支援をしてもらえるのか。」「その支援は、中学校と同等ではないかもしれないが、必要な支援を伝えられるだろうか。」と進学してからのことを考えている担任が多い。さらに、「高等学校を卒業し、自立をしていくことができるのか。」など、生徒の将来を考えた進路指導を行っている。「社会参加や自立に向けた力を育てるためには高等学校進学に向けて、どのような力をつけて卒業させるとよいのか」という内容は特別支援学級担任にとって、非常に大きな課題といえる。

グラフを見ると、学力だけではなく、発達特性に応じた支援、個別の支援の数値が多いことも興味深く、進路決定をするにあたって、高等学校側の支援の方法も進路決定の１つの要素となっている。

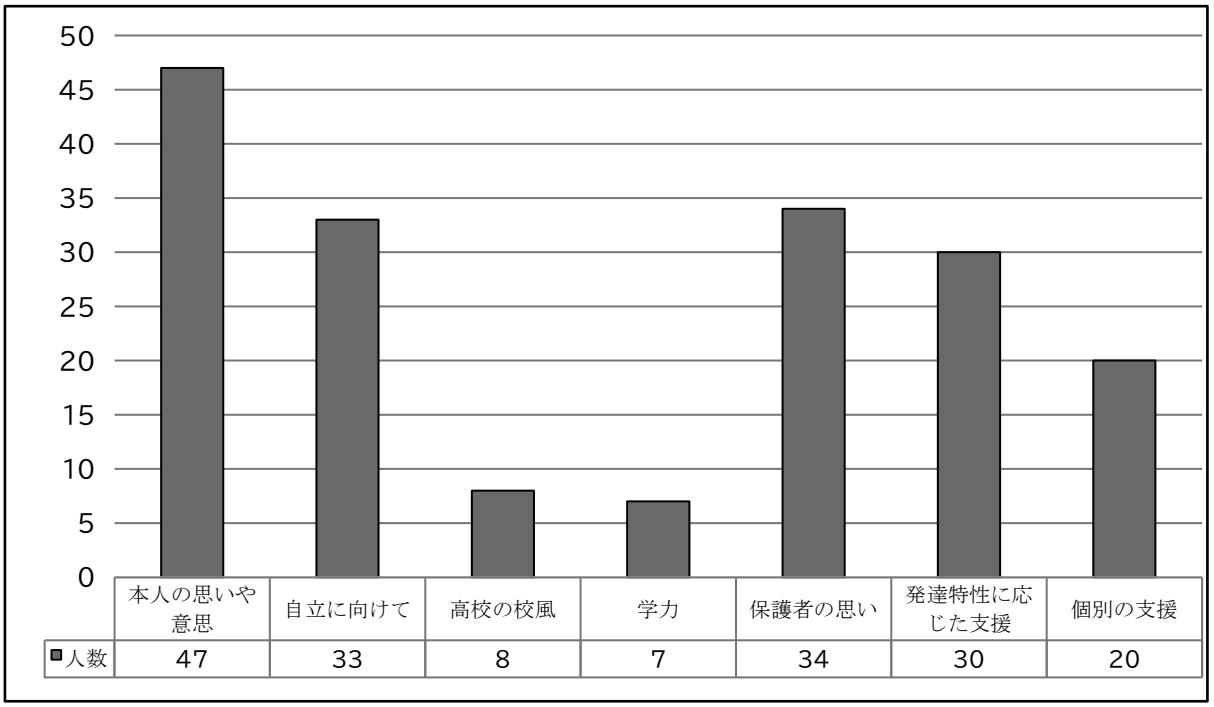


図19　進路指導について大事にしていること

表11　進路指導において大事にしている項目の記述

生徒本人の人生だと思うため。保護者と相談する部分もあるため。
将来を見据えて、本人が学校生活を安心して送ることができるために何が必要かを考えた。
まだ3年生をもったことがないのでよく分かりませんが、本人の思いを大切にしたい。
支援の程度は学校によってことなり、特別支援学校ではない公立の学校や私立、通信などの学校はその学校によってできる支援も変わってきます。その中で、実際に見学に行ってもらったり、直接話を聞いたりして自身が感じるものから合う場所を進学先に選んでほしいと思っているから。
生徒が自立に向けた学習や生活体験を積み重ねられる場所かどうか、また、生徒の特性を理解し必要な支援を得ることができるかどうかが重要だと考えるから
本人に特性にあった高校を選びたい。
進路は自分で決めなければいけないものだから、本人の意思を大切にしたいです。しかし、本人の考えだけでは厳しい所があるので、学力面と将来のことを、一緒に考えていきたいと思っているからです。
生徒と保護者にとって最も適した進路を共に探していきたい。
特別支援の生徒だからこそ、個別の対応が必要と感じるため。
将来の生徒像が見えにくい

「落ち着けるところがほしい。」と言った生徒がいるのでどれだけ個別に対応してくれる高校があるか知りたい。また「入学できても卒業までついていけるか。」と不安を口にした保護者もいるので、どこまで”できなくても”卒業できるのか知りたい。
進級、卒業できる環境
将来どのように自立していくか、本人がしっかり考えることが大切だと思うから。
本人の意見と保護者の考えをできるだけ一致させること。 まずは、本人が将来何をしたいのかが大事だと思います。本人が、まだわからない場合、保護者の考えを聞くこと。
入試に合格するだけでなく、その高校を卒業できるようにさせたいから。
最終的に自立につながる進路が大切さだと考えます。社会に出て働き、給料をもらって自立した生活を送るためにはどんな進路を選ぶべきか、本人保護者と繰り返し面談します。通うのは本人なので、保護者と納得してした上で決定してもらえるようにします。
就労の枠で仕事につくのか、自力で仕事につくのか見通しをもたせ、そのために中学卒業後、どのような道があるかイメージをもたせる。
本人が安心して卒業を迎えるためには、学校の特徴が本人にあっているかがとても重要であると考えている。本人の将来を見据え、より良い進路先を見つけるためには、5で選んだ内容は不可欠だと考える。
本人が高校でやっていけるのか。自立して行動できるのか。
発達特性にあわせて高校を選ぶことも大切だと感じますが、高校では支援があってもその出口は大丈夫なのか、心配になります。 中学校は情報はたくさん与えるべきだと思いますが、最終的には本人と家族の願いが一番かと…思いました。
本人・保護者の思いが高校進学に前向きでなければ、進路を選択しても続かない可能性があるのと、本人にしっかり学校の雰囲気を感じてきてもらった上で選択すべきだと思うから。
生徒の将来を考えて優先すべきことだと思うから
特別支援の学級の生徒の進路を考えた時に本人の意思等を大事にしながら、高校側とマッチできるかを考えているため
進学先でさらに成長出来るように。
進路を考える中で進学した際に本人も保護者も納得がいき、実際に進学した際も継続してついていけるような選択をしてほしいから。
本人に適した進路選択をする

進学に対するイメージをわかせるために必要です。また、中学卒業後、高校卒業後に社会的自立に向けてどのような活動を高校でするのか、教員や保護者が気にしているからです。
どんな学校でも、その子に合う学校がいいと思うし、高校で自信をつけ、将来自立した生活を送れるようにして欲しい
希望の高校に応じた受験指導。
社会に出たら、自立しないといけないから。
高校には特別支援学級がなく、特別支援教育の考えもそれぞれなので、その高校でやっていくには何ができないといけないのか、高校はどこまで手を入れてくれるのか、慎重に見極める必要があると思います。
これまでの経験をふまえて、考える。できるだけ情報を集める。
生徒本人と親が安心して次の3年間を過ごすことができるように、また、その3年間で卒業後の進路を獲得できるように一緒に考えられたらと思います。
高校3年間よりもその後まで視野に入れて選びたいから
本人のやる気がないと続かないので、まずはそこを大事にしている。あとは、高校入学後、卒業後の選択肢が広がるよう、社会とつながるよう。
高校入学後の学校生活についていけるのか、卒業後の進路についての支援があるのかが大切だと思うから。
本人が自立して社会生活を送ることが特別支援教育のゴールだと思うので。
本人の希望を重視してあげたい気持ちはあるが、自分のことをすべて把握できているとも思えないので、対応が難しい。
3年間、高校へ通うことができる環境が必要だと思うから。3年後に就労できるための成長が期待できる高校の支援やカリキュラムがあればよいなと思います。

２　校区内の小学校特別支援学級担任・保護者へのアンケート調査

①中学校側から中学校の特別支援教育に関する説明を行うことについての意見。

②特別支援教育での悩み。

③進路指導について。

上記の内容について分析すると、特別支援学校に進学をさせる際に、高等学校卒業の資格が取れないことが将来の不安につながっていることもわかった。保護者は特別支援学校へ進学し、就職先でうまくいかなかったときに、高等学校の卒業資格がないと自立ができないのではないかと不安に感じる保護者も多い。特別支援学校の良さや自立への支援、教育課程を進路学習会で説明をしても、全日制への進学希望は増加している。

以上のことから進路指導において、「自立させる」「自分の将来を考える」「自分を理解している」ことが将来につながっていくと強く感じ、生徒が中学校在籍中に付けておいた方がよい力の１つだと強く感じた。

次のアンケートは小学校の先生方の悩みを抽出したものである。

「発達段階の違いが大きい中で、日々の学習や生活習慣の確立を目指し、取り組んでいる。」

「学習の定着を目指して、いろいろな取り組みを行っているが、なかなか学習の定着が難しい。」

「家庭との協力がなかなかできず、学習も生活も積み上がっていかない。」

というアンケートの内容が挙げられた。

また、小学校の先生方は「進路指導」に悩まれることが多い。高校進学についての情報を知る機会が少ないこと、３年後に進路を決定していくことは理解しつつも、どのような進路選択があるのかの情報が少ないこともあり今後の課題でもある。

上記の小学校でのアンケート内容を考えたときに、学習内容の定着はもちろんだが、将来を考えたときに

自分のことを知る→「自己認知」 相手のことも知る→「自己理解・他者理解」 自分で決められることは自分で決める→「意思決定」 自分を表現する→「言語化」

の４点は発達段階からも中学校３年間で取り組むことに大きな意味があると言える。

保護者会後のアンケートでは、

「中学校を卒業させ、高等学校に進学させるまでが自分の役目、その先まで考えるのは、なかなか難しい。」

「将来を見据えて、子どもの進路を考えないといけないことはわかっているが、今までの子育てが大変なこともあり、就労や大学、専門学校までは気持ちが向かない。」という意見や育児の場面で苦労されたことを述べている保護者も多く、高等学校から先のことまで気持ちが追いつかないという保護者の意見もあった。確かに、幼いころからの生徒に向き合い、うまくいくことばかりではなかったと感じられることから、教師が生徒一人一人としっかりと向き合い、保護者に寄り添いながら生徒も保護者も支援をしていく必要があると痛感した。さらに、保護者との話の中から、生徒が自分のことを理解することは、進学先や就労に向けて必要な力であると同時に、自分のことを決めていく場面設定をより多く経験することは、生徒の将来に必要な力をつけることにつながっていくことだと考えた。

３　本校の特別支援学級卒業生への調査卒業生（知的学級・自情学級）の生徒に次の項目でアンケートを実施した。質問には、記述できることころを作り、卒業生徒の意見を記入できるようにした。

質問１：高等学校に進学して、次の進路（将来）を考えたときに中学校で身に付けておいた方がよい力は何ですか？

①自分を知っておく力
②自分の気持ちを表現できる力
③学習を積み重ねておくこと
④自分で決められることは決める力

質問２：進学先やアルバイト先で必要な力は何ですか？

①学習の理解度
②相手とのコミュニケーション
③自分のことを伝えられること
④困ったことを言えること
⑤進学先や仕事先で環境に慣れること

質問３：後輩に伝えたいことがあれば自由に書いてください。

結果は以下のとおりである。

質問１に対して、①自分を知っておく力　②自分の気持ちを表現できる力　が最も回答が多く、自分のことを理解しておいた方が自分にとって良いと感じている生徒が多かった。

また、質問２では、①相手とのコミュニケーション　②自分のことを伝えられること　③困ったことを言えること　が最も多く、「言語化」できることが進学先やアルバイト先で必要だと感じている生徒が多かった。

結果からわかることは、中学校３年間で、自分のことを全て理解することは難しくても、自分の強み、弱みがわかり、状況に応じた対応ができる力をつけることの必要さがわかった。さらに、困ったことや自分ことを短い文章でも表現できる力を特別支援学級の中で身に付けられる支援を行っていくことが重要だと考えた。

アンケートの自由記述で、後輩に伝えたいことを記入してもらった。その一部を紹介する。

中学学校では気持ちがコントロールできなくて、自分でもいけないことはわかっていても、周りに嫌な思いをさせました。私が高校に通って、思ったことは、中学校の時に自分のことを少しでもわかって、卒業したほうがいいと思います。自分をわかるのは時間がかかるけど、自分がわかれば、いろいろな対応ができるからです。私は将来、私みたいに苦しい思いをしている人を助けられる仕事をしたいと思っています。

４　高等学校への情報収集のための訪問

各学校の現状や今後の取り組みから話を聞き、高校への進学先の事だけではなく、卒業後の自立を見据えた支援に取り組まれている。

発達に課題がある生徒の進学は、進学した高等学校でどのような支援を受け、進学や就職をしていくのかは、中学校の特別支援学級担任をしている教師が知りたいと思っている部分であり、今後の進路指導にも役立てたいと考えているところである。

３校の生徒支援の方法は、各高等学校の特徴を踏まえ、どの学校でも教育課程で生徒をしっかりと支援に取り組み、教師側が生徒の情報を共有していた。また、通級指導教室の拠点校として、様々な学校と連携し、自県の特別支援教育を支えてく取り組みを学校内外問わず多数の場で実践をされていた。

高等学校に進学すると、学びも専門的になり、３年後には進学や就労の選択をしなければいけない状況になる。また、自分で進路を切り拓く力が必要になり、さまざまな場面で選択の機会や意思決定の場面が多くなってくる。各学校の取組みにおいて、教育課程は様々だが、必要となってくる力は「自己認知」「自己理解」「意思決定」「言語化」だと感じた。

また、小田　浩伸　監修　編著　大阪府教育長教育振興室　の「高校で学ぶ、発達障がいのある生徒のための社会参加をみすえた自己理解」では、発達障がいのある生徒が「社会参加」を目指し、高等学校卒業後の進路先での困り感の軽減や必要に応じて周囲に適切な支援を求める力の育成を目指し、生徒の自己理解の促進と自尊感情や自己肯定感を大切にした指導・支援についてまとめている。その中には、学校全体で取り組んでいく必要があること、支援のポイントをより多くの実践と事例を用いて具体的に提示している。進路支援や自己理解の重要さや社会参加に必要なことも詳しくまとめている。

高校卒業後の環境は大きく変化し、中学校や高等学校と同じような支援をしてもらえる環境は少ない。その時に、「自分を理解していること」「自分のことを言語化できること」の力をつけておけば、周りの人とのコミュニケーションを図り、気持ちを伝える事ができると考える。さらには、進学先や企業への合理的配慮を求める行動ができるかもしれないと考える。

第２節　実践の結果

１　自立活動での指導実践（個別支援・集団支援）

（１）支援の結果

表12　実践の成果と変容

	A	B
成果	・不安定になる前に伝えられる。 ・自傷行為をしなくなった。 ・支援者と交渉したり、あきらめたり落としどころを見つけられるようになった。	・不安な内容を伝えられるようになった。 ・状況に応じて、着るものを変化できる。 ・気持ちがわからないときには、相手や他の人に聞く。
変容	・表情が豊かになり、状況に応じた対処方法をできるようになった。	・気持ちを話すことができるようになった。文章が短いときもあるが、自分の言葉で表現できるようになった。
現在の状況	・様々なことで悩みは尽きないが、学校に通いながらアルバイトをしている。 ・将来は大学に進学し、自分と同じような子どもと接することができる資格を取るのが目標。	・通信制の高等学校に進学し、提出物も忘れることはない。就職に向けて、自分ができる仕事を考えているのだが、自分に合った仕事を見つける目標を立て、取り組んでいる。

（２）生徒の変容

Ａの生徒は、この取り組みを始める前は、生徒の感情の不安定さが強く、学校生活が通常にすごすことができない状況もあった。生徒の感情が不安定になってからの対応になるため、生徒自身もとてもきつい思いをし、落ち着くまでに時間がかかる。落ち着いたころには放課後になっていることも多かった。取り組みを始めてからは、不安定になりそうな時には自分から不安定さを伝える事やどうしたいのかを伝える事ができるようになった。

Ｂの生徒は気持ちが安定していることが多かったが、中学校の在学中に学校への登校を渋るようになったことがあった。３年生で取り組みをはじめ、日々、積み重ねていくと、自分の先の見えない不安さ、人目を気にしていることがわかってきた。また、登校を渋っていた時のことを話せるようになった。伝える言葉は多くなかったが、卒業するころには、自分から気持ちの状態を話せるようになり、相手の気持ちをくみ取ろうとする場面も多くなった。

（３）成果

じっくり時間をかけて取り組むことが重要であり、生徒の困り感とマッチしていることが大事である。また、生徒の少しの変化も生徒に返し、うまくいったことを繰り返し伝え、評価していくことが生徒の自信と将来につながっていく。２人とも、自分の目標を決め、そこに向かって進学や就職を考えている。日常生活を振り返り、自分の状態を振り返り、第三者に聞いてもらうことは「自分理解」が深まり、「自己決定」をしようとする力がつき。気持ちを「言語化」しようとすることができた。周りの人とつながりながら、将来を支える力になっていき、生徒にとって、自信につながる。

（４）学校行事を活用した集団支援の実践での生徒の変容

この取り組みを行って、生徒たちの変容は大きい、現３年生は自分たちがクリスマス会を開いてもらい、入学してきている。自分たちの時に開催してもらったことを覚えており、行事に対して良い印象がある。生徒の特性上、行事への参加が難しいと考えていた生徒もクリスマス会には意欲的に参加することができている。生徒たちは司会や運営、クリスマス会の記念品の企画・作成などの仕事を引き受け、役割を果たそうとする姿が見られた。中には得意ではない仕事もあったと思うが、得意でない仕事にも取り組めた理由は以下の４点が考えられる。

①生徒自身が参加をして、入学後の不安が少し軽減されたこと。
②上級生が下級生に次の仕事を覚えさせたいという責任感と一緒に仕事をする協働感。
③全員で取り組もうとする気持ち。
④自分には何ができるかと考えられる場面設定があったこと。

特にそれぞれの役割は、生徒自身が考えたこともあり、個々に合った仕事分担がされていた。担当教師側も会議を見守りながら、多くの声掛けを行った。

声掛けのポイントは①先取りして声をかけない。②考え、判断しないといけない場面設定をすることで、周りに相談やきかなければいけない状況を作る。③係を縦割りにする。である。できるだけ生徒が自分たちで考えて動き、わからないことは必ず教師や周りに聞くという姿勢をしっかり持っていたことも行事の成功につながっている。

（５）成果

本番は教師の出番はなく、生徒が自分たちで行うことができた。このことは生徒の大きな自信につながり、教師も生徒の新たな部分を見つけることができ、お互いの成長につながっている。

この行事を通して、大きな学校行事に参加することが難しい生徒も、自分の役割を果たすことで、自分の苦手、得意がわかり、自分を知る機会となった。今回の行事は複雑なものではなく、生徒も教師も取り組みやすい行事であり、生徒に目標も持たせやすかった。実行機能を視点に置くことは、教師側の目標設定をしっかりと持っておかなければならず、生徒にどんな力をつけさせ、成果があるのかを見通しておかないといけない。その部分は特別支援学級で情報を共有し、計画的に進めていく必要がある。

また、今回の行事で、生徒からお願いと提案があった。クリスマス会に参加予定の児童が修学旅行で参加できなかったことに対して、「参加できなかった小学生にも記念品を届けたいので、作った記念品を届けてくれますか？」

この一言は、生徒の成長と私たちが目指している、自己理解、言語化、自己決定につながっている。参加できなかった小学生の思いや、自分たちが取り組んできたことへの責任感、自分の思いを相手に伝えることなど、相手にお願いし、交渉することなど、いろいろな要素が詰まっている言葉であった。

２　学年・学級担任・特別支援学級担と連携した支援

（１）グラフの活用方法と成果

このグラフの活用は、生徒、特別支援学級担任、交流学級担任など様々な活用方法があると考えている。ここでは①生徒　②特別支援学級担任　③交流学級担任　④保護者　の４つの視点から考える。

①生徒

自立活動の時間を使って、面談を行っていく。面談をするときは、気持ちが安定している時が望ましく、午前中に行う。グラフを担任と一緒に見ながら、１週間を振り返る。生徒自身は気持ちが不安定な時にどのような行動をしたのか、クールダウンが必要だったときには、どのくらいの時間で落ち着くことができたのか。何をすれば気持ちが落ち着くのか。など具体的に時間や場所を確認できたことが大きく、特別支援学級担任と内容を共有できることが非常に有効であった。また、気持ちが安定している場面や状況を思い出させ、安定しているときの感覚を言葉で表現させ、「言葉」と「行動」を生徒に認識してもらう。この繰り返しが生徒の安定や自分を知ること（自己理解）につながっている。

②特別支援学級担任

グラフをつける時には、担任が考える気持ちの数値化とその日の様子を記入している。生徒と面談するときだけではなく、振り返って生徒の気持ちの変容を見ることができ、どのような時に気持ちのコントロールがむずかしくなるかの予測も可能となる。

例えば、学校行事で不安定さを見せる生徒には予め、行事の内容や動きを示すことができ、学期末試験で不安定さ見せる生徒には、試験範囲を細やかに説明し、学習の見立てをすることができる。生徒には、グラフを活用し、どのような場面が不安定さを示すか認識している場合には、共有した情報をもとに、学習や学校生活をどのように進めていくか話ができる。

実際に、グラフをもとに、面談をした生徒は多少の不安定さはあるものの、大きく気持ちが崩れることがなく、学校生活や学習に取り組むことができている。逆に登校日が少なく、なかなか面談に取り組めなかった生徒は、生徒自身の発達課題の影響もあると考えられるが、気持ちの不安定さや気持ちを伝える事については、面談を行った生徒よりも変容が見られなかった。

③交流学級担任

特別支援学級担任と交流学級の担任は生徒の情報を共有し、支援に活かしていく必要がある。このグラフは数値が可視化されているので、短時間で情報の共有が可能なことが大きい。情報の共有はとても大事な時間ではあるが、なかなか定期的に行えない場合もある。できるだけわ

かりやすく簡潔に共有することを目的としているので、グラフを使った情報共有は生徒理解にも有効であった。特に数値が落ち込んでいる時の様子を共有すると、次の手立てを一緒に考えることができた。

④保護者

保護者との面談の中で活用することは、保護者にとっても有効であったと言える。数値化することは、保護者にも見やすく、家庭での様子を聞く、きっかけともなった。毎日の連絡帳に生徒の様子は記入しているが、月日を追って、生徒の気持ちの変容を追っていくことは、保護者の振り返りにもつながり、保護者の行動もフィードバックできる。保護者との話の中で、生徒の気持ちが不安定な時に、保護者自身も不安定な時があった。という話も聞くことがあり、保護者も自分の気持ちや行動を振り返ることもできた。

（４）今後の活用方法

グラフで可視化することは、見やすく、フィードバックしやすい。また、生徒と共有することで、生徒自身も担任の先生が自分を見てくれている安心感にもつながっている。今後は、グラフを学校全体で活用すれば、発達に課題がある生徒だけではなく、気になる生徒の気持ちの変容や支援への糸口になると考える。

今回は、教師が数値を入力し、生徒と共有しながら面談をしていく実践だったが、生徒自身に数値を記入させ、「担任との数値と認識の差」から面談を行っていく方法もあると考えている。そこから自分の感情を話すことで、「言語化」「自己理解」がより深まると考える。

（５）グラフの作成方法

グラフは縦軸に数値、横軸に学校の様子や生徒の気持ちを記入する。記入する文章は長くなくてよい。

気を付けて書いた部分は、

・登校の様子
・授業の様子
・表情の変化

など。ポイントをしぼって、記入しておくと分析しやすい。

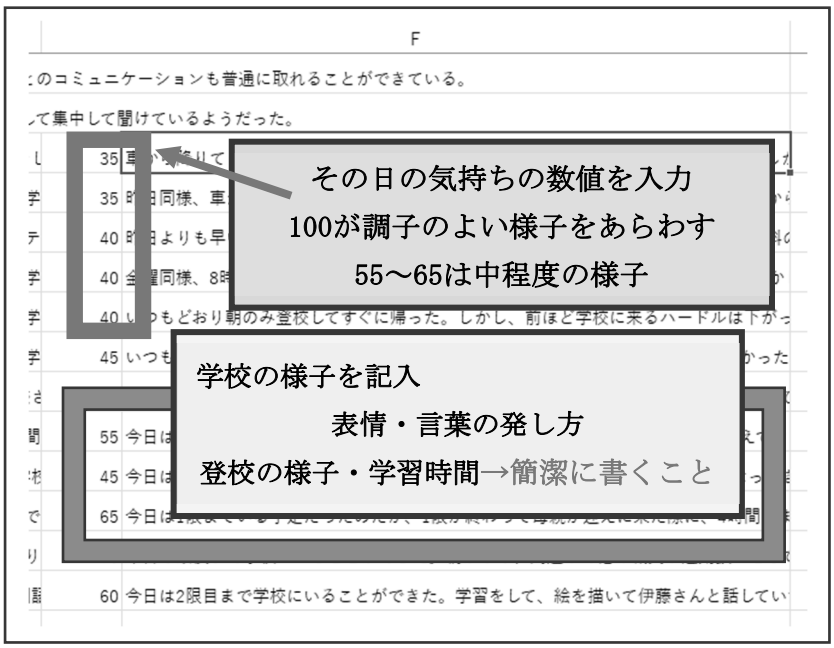


図20　グラフの作成方法

下記の計算式に当てはめ、グラフの作成として、情報を収集し、分析する。

```
=SERIES(Sheet1!$O$3,Sheet1!$A$4:$A$273,Sheet1!$O$4:$O$269,7)
```

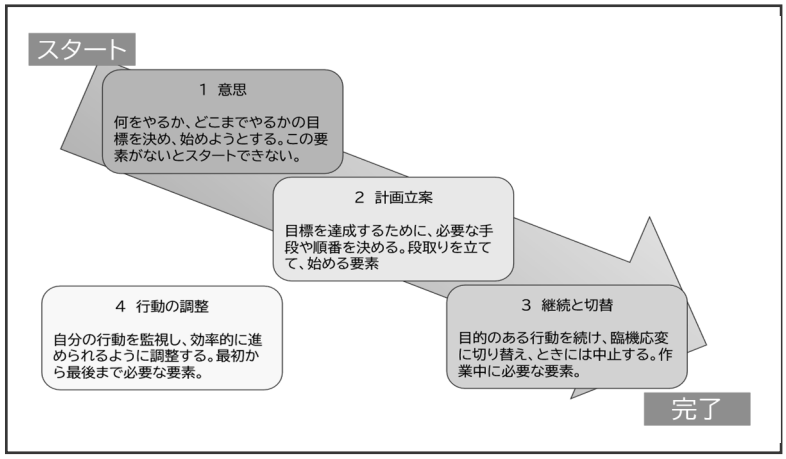
第４章　考察・まとめ

実践はそれぞれ違う視点からアプローチし、生徒の実態に応じた取り組みである。実践は今後の課題もあるが、生徒の変容も大きかった。教師は生徒をどのように理解し、どのような目標を持たせ、どこに支援ポイントをおくかを決めていくのかが重要である。

高山先生の著書には様々な場面からの支援のヒントが書かれており、学校での支援のポイントになるキーワードがたくさん出てくる。この研究では実行機能を柱とし、細かく３つのキーワードを中心に実践を行ってきた。

・「自己理解」は、これから生きていく上で、自分を知っておくことは自分のできないこともわかり、困ったときどのようなＳＯＳを誰にだせばいいのかもわかる。発達に課題がある生徒は、なかなか自分でＳＯＳを出せないことも多く、今回の研究では１対１の場面、知らない場所や人との関りの場面、集団での場面で実践を行うことができた。

特に、自分の感情をコントロールする部分に焦点をあて、実践をしている。今回の実践では、気持ちが安定している時も忘れずにフィードバックしたことは成果である。難しかったのは、生徒はどうしても気持ちが不安定な時を思い出し、その時の気持ちがよみがえってくる「フラッシュバック」になってしまうことである。不安定な時でも、気持ちが落ち着くような対処方法をフィードバックすることが多くなるように仕組んでいる。



・「自己決定」を仕組むにあたり、全て自分で決めなさいということではなく、中学生の間は「自分で決められることは自分できめる」程度の感覚でよいと考える。発達に課題のある生徒は「どれか選んでいいよ」という声掛けにはなかなか選択できず、気持ちが不安定になる生徒も多い。まずは２択からはじめ、徐々に増やしていく方法がいいと考える。その時に大事にしたいのは、選択する項目のメリットとデメリットを説明することと考える。慣れてくれば選んだ理由を答えさせることも必要になる。この取り組みの繰り返しが、言語化につながり、本人が納得して選択することにつながる。

・「言語化」は、発達に課題のある生徒はコミュニケーションが苦手な生徒や相手の気持ちを読めず、思ったことをついロにだしてしまうことがある。今回の研究では特別支援学級の生徒だけではなく、学校外の人と話をする機会を設定した。これから自立に向け社会参加をしていくに

あたり、「相手に何かを尋ねる。」「わからない事は聞く」など人とかかわることが多くなる。日頃話をしない人との関りをもつことは生徒のこれからの成長につながることを生徒自身が学んだことは大きかったと考える。

私は、発達に課題がある生徒が将来、進学先や職場などの社会で周りとかかわりながら生きていけることが大事だと考えている。本研究では実践を通して、特別支援教育コーディネーターとして、生徒の「進路実現」と「将来を支える力」を通常学級担任や特別支援学級担任と一緒に取り組んでいくことを目的として研究に取り組んできた。

生徒の個別最適な学びにつなげるには、「自己理解」「自己決定」「言語化」の力をつけ、その力を引き出せる教師の的確な支援が必要だと考える。

この研究での一番の成果は、実践をもとに、それぞれ違う視点から、人との繋がりから、将来につながる生徒支援へのアプローチを検証できたことである。

また、今回の研究では自立活動を使った個別の対応、気持ちの数値化、学校行事という学校の教育課程の中で取り組めたことも大きい。日頃から特別支援教育で何を学ばせ、どんな支援をしていくことが生徒の将来に役立つのかを考えて取り組んでいるが、進路実現だけではなく、その先を見据えた支援をキーワードで絞って、取り組めたことは、視点が焦点化され、取り組みもしやすかった。さらに、今回は、「実行機能」を柱においたことで、私たち自身も課題が焦点化され、「実行機能」をもとに研究を進めることができた。

さらに、今回の研究で高等学校に視察に行ったことは、中学校で身に付けておくべき力が何なのかを考える視点を頂き、研究につなげることができた。視察や実践発表では、「私は○○が苦手だけど、○○支援をお願いできれば○○ができる。」という自分を理解し、その後の支援や行動まで考える力をつけておくことの必要性や将来のどのような場面で必要になるかを学ぶことができた。「自分を理解」することが生徒の将来を支え、社会参加への大きな助けになることがわかり、中学校で少しでも自分を理解しておく力をつけて卒業させる必要があると強く感じた。

これからの特別支援教育は、社会参加がキーワードとなってくる。発達に課題がある生徒が社会参加を目指していく時に、特別支援教育を受けた生徒たちが円滑に社会参加するためには、以下のような支援が重要である。

①生徒の個々の教育的ニーズに合わせながら、社会参加し生活や働くためのスキルを身につけることができる支援。
②地域社会との連携を強化し、生徒たちが地域で活躍できるような環境を生徒自ら整えるための支援と提案。
③生徒たちが自立して生活し社会参加を目指せる支援を一緒に考え提供すること。

この３点を視野に入れながら、中学校３年間で「自己理解」「自己決定」「言語化」を中心とした取り組みを筑紫地区から進めていきたいと考えている。１人でこの取り組みを進めていくのは難しいが、地域の教員や関係機関と協力しながら、一緒に取り組んできたいと考えている。

引用・抜粋・参考文献

（１）文部科学省：特別支援教育推進について（通知）

（２）厚生労働省：障害者の就労支援について

発達障害者支援施策の概要　　障害保健福祉部

若年コミュニケーション能力要支援者就職プログラムの実施

障害者白書　第６章　障害の自立支援の推進

（３）福岡県教育委員会：福岡県特別支援教育推進プラン（第２期）

（４）福岡県教育委員会：福岡教育センター　特別支援教育の指針　　自立活動とは

（５）中央審議会答申：

特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）

（６）福岡県教育委員会：

令和５年　福岡県特別支援教育資料

令和６年　福岡県特別支援教育資料

（７）独立行政法人　高齢・障害・求職者雇用支援機構：職業準備性ピラミッド

（８）高校で学ぶ発達障がいのある生徒のための社会参加をみすえた自己理解

～「よさ」を活かす指導・支援～　ジアース教育

監修　小田　浩伸

編著　大阪府教育委員会

（９）ＮＰＯ法人えじそんくらぶ代表　　高山　恵子

発達障害の子どもの実行機能を伸ばす本　　講談社

発達障害の子どもに自立力をつける本　　講談社

発達障害の人が自己実現力をつける本　　講談社

実行機能をアップする37のワーク　　合同出版

自己理解力をアップ！　自分の良さを引き出す33のワーク　　合同出版

子どものよさを引き出し、個性を伸ばす「教室支援」　　小学館

（10）文部科学省　キャリア教育の手引き（2023年　3月）

謝辞

この度、このような研究の機会を与えてくださり、研究助成をいただいた公益財団法人みずほ教育福祉財団様に深くお礼申し上げます。

また、本研究を特別支援教育研究助成論文として、御推薦いただいた独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所の皆様にも深く御礼申し上げます。

本研究を行うにあたり、実践をしていただいた先生方、アンケートにご協力いただいた、小中学校の先生方、厚く感謝申し上げます。

また、視察を快く受けて頂いた、佐賀県立太良高等学校の杉光教頭先生、中村先生、佐賀県立小城高等学校の吉永先生、島根県立浜田高等学校の河井教頭先生をはじめ、山本先生、岡野先生、島根県立益田高等学校の龍河先生、野稲先生、お忙しい中、資料の準備や実践の紹介をしていただき、ありがとうございました。

そして、本研究をまとめるにあたり、独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所　発達障害教育推進センター総括研究員の井上秀和先生には心より感謝申し上げます。

本研究は、特別支援教育コーディネーターが通常学級や特別支援学級担任とつながり、卒業後や将来につなげることを柱に研究に取り組んできました。筑紫地区の特別支援教育の先生方と話をしたり、小学校の先生方と話をしたりする中で、生徒の将来を見据えたときに、「自己理解」「自己決定」「言語化」がとても重要な力であると感じました。その力を身に付けるには学校教育の中で、実行機能の視点を活用した授業を仕組むことでした。複雑な実践や取り組みではないかもしれませんが、生徒を理解し、生徒に身近な話題や日常生活の中で取り組める実践を仕組んできました。

この研究によって、中学校卒業時に生徒自身が自分のことを少しでも理解し、自分なりの取扱い説明書を持ち、夢に向かい自信を持って歩んでいける生徒が少しでも増えること。そして、その生徒が周りの人にも手を差し伸べられることを願っています。

【実践授業を行った　　研究グループ】

福岡県筑紫野市立二日市中学校　　教諭　村上　郁子（研究代表）

福岡県筑紫野市立二日市中学校　　教諭　杉野　真也

福岡県筑紫野市立二日市中学校　　講師　岩瀬　竜馬